

天理大学附属天理図書館蔵三条西家旧蔵本「雨夜談抄」翻刻と解題 —『帚木別注』諸本の問題に及ぶ—

ノット・ジェフリー

*キーワード

源氏物語・宗祇・帚木別注・雨夜談抄・注釈

〔解題〕

一、底本の書誌情報

本稿は、宗祇『帚木別注』の未刊善本として、天理大学附属天理図書館に所蔵されている三条西家旧蔵本「雨夜談抄」（九一三・三六／イ二四七、以下「三条西家本」）を全文翻刻したものである。なお、本稿で紹介する当該本のほか、同図書館には同作の伝本が他に二点伝わる。まずは、天理図書館蔵三条西家本の書誌を確認する。

○装訂 袋綴装で全一冊。現在は紙縫二本による仮綴じ状態。が、

表裏（図版1、8）に確認できる余分な綴じ穴一連と、か

つてそこに通されていたであろう綴じ紐が残した線状の跡から、通常の四つ目綴じだった過去が窺える。

○寸法 縦二七・四糎×横二一・二糎。

○表紙 表表紙は浅い茶色系で、無地のやや粗めの楮紙（図版1）。その見返しとして共紙一丁が貼付される。裏表紙はなく、現状は墨付き最終丁に続く一丁の共紙があるのみ（図版8）。

○外題 左肩に直書きで「雨夜談抄」とあり、本文と別筆（図版1）。

○内題 無し。

○料紙 楮紙。

○紙数 裏表紙にあたる共紙一丁を含み、全三十一紙。

○墨付 全三十丁で、巻頭となる一丁ウに始まり（図版2）三十丁ウの奥書に及ぶ（図版6）。ただし、巻末と奥書との間に

半丁を空ける（図版5）。本文は一筆だが、訂正等の跡は一部別筆か。

○遊紙

無し。

○行数

毎半丁十五行書き。一行の字数は二十二～二十六字で、約二三・四糎の高さで丁面の余白は少ない（図版3、4）。

○体裁

注記項目ごとに、引用される『源氏物語』本文と区別して、注記本文を三字下げて記す。更に、引用部分の中でも、『源氏物語』所収和歌本文の識別を図り、僅か一字のみ下げて、その他引用本文と注記本文との間に掲出する方針が貫かれる（図版3左、4右）。

○印記

（1）巻頭丁の右上に単郭楕円朱印「三條西」とあり、元は三条西家に所蔵された一本であることが判明（図版2）。

（2）印記（1）の左に単郭長方朱印「天理図／書館蔵」とあり、巻末丁左下にも同印が見え、現所蔵機関を示す（図版5）。

（3）この他、受入登録印と思われる印記が二ヶ所あり、底本が天理図書館の所蔵となった経緯の一端が窺える。

・表見返の中央に、単郭楕円紫印「天理図書館／昭和廿七年五月一日」とあり、円内に「285704」と印字される。

・裏表紙丁オの右下に、単郭長方紫印「昭和廿五年十二月一日／寄贈 天理教会本部」とあり、漢数字は手書き。

○年代

書写の時期は判然としないが、江戸初期まで遡るか。

両表紙から内部まで、経年による劣化に加え、虫損、シミ、汚れ等も各丁に認められる。これに比して本文上の問題は大きくないようで、虫損による欠字は少々あるものの、判読困難な箇所も多くはない。錯簡、落丁などの物理的な本文欠陥は一切なく、江戸初期頃と目される書写としては保存状態がさほど悪くないが、取り扱いに注意も必要といえる。

本文においても同様で、美麗な写しとはとてもいえず、それがかえって可読性を意識した筆跡という印象さえ与える。衍文・脱文等の類もありないようで、他本と比べても善本のうちに部類されよう。

振り漢字、読み仮名、声点、濁点、句読点等、読解の便宜を図った措置はない。その一方で細かい訂正を施している箇所は軽く数十ヶ所に上るが（図版7）、多くの場合それは校合の跡というより、誤写を修正している趣があつて（図版3左から三行目、図版4右から五行目等）、筆跡に見るべきところがないのと対照的に、ある意味よく整えられた本文とも考えられる。

これらを総合するに、底本は三条西家の旧蔵本とあつても、その筋の良さについて急いで結論を出すべきではないように思われる。とはいふものの、源氏学が家学の一つともなった三条西家だけあつて、また特にその著者・宗祇との深い関係を合わせて考えると、注目に値する一伝本であることは間違いない。加えて、以下に紹介するように、古態に遡る可能性のあるいくつかの特徴を備えた伝本群を代表しうる一本としても、資料的価値を豊富に有し、大いにその本文提供に意味があろう。

表1 『帚木別注』 諸本一覧

通番	底	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
略称	三	陽	伊	稲	群	城	神	桂	丸	京	成	金	吉	紀	河	春	写	天	宮	国	黒	桃	宣	斯	静	九	地
伝本・所蔵機関	天理大学附属天理図書館蔵三条西家旧蔵本	陽明文庫蔵本	東海大学付属図書館桃園文庫蔵伊達家旧蔵本	安田女子大学図書館稲賀敬二文庫蔵本	宮内庁書陵部蔵続群書類従本	宮城県図書館伊達文庫蔵本	神宮文庫蔵本	宮内庁書陵部蔵桂宮本	丸成文庫蔵本（松本大氏個人蔵）	京都大学大学院文学研究科図書館蔵本	石川武美記念図書館成實堂文庫蔵本	金沢大学日本語学日本文学研究室蔵本	天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵本	和歌山大学図書館紀州藩文庫蔵本（上中下三冊）	今治市河野美術館蔵本	東北大学附属図書館三春秋田文庫蔵本	龍谷大学大宮図書館写字台文庫蔵本	天理大学附属天理図書館蔵丙本	宮内庁書陵部蔵丙本	国立国会図書館蔵本	実践女子大学図書館黒川文庫蔵本	東海大学付属図書館桃園文庫蔵乙本	本居宣長記念館蔵本	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本	静嘉堂文庫蔵本	九州大学附属図書館蔵本	早稲田大学図書館伊地知鐵男文庫蔵本
外題	直書〉雨夜談抄	直書〉雨夜談抄	題簽〉雨夜談抄	直書〉雨夜談抄	題簽〉続群書類従 五百十九	題簽〉帚木別注	直書〉雨夜談抄 全	直書〉雨夜談抄	題簽〉帚木別注	題簽〉「二二三」別注	題簽〉源氏物語帚木別注	ナシ	直書〉帚木別注	題簽・下巻〉帚木別注 下「上巻題簽欠」 題簽・中巻〉はゞきゝ別注 中	ナシ	直書〉はゞきゝ	直書〉源氏帚木巻別注 全	題簽〉帚□□ 宗祇作	ナシ	題簽〉帚木別注 宗祇	題簽〉帚木別注 宗祇法師著 全	題簽〉帚木別注 全	題簽〉帚木抄	直書〉源氏	題簽〉帚木別注	題簽〉源氏物語帚木別注 宗祇述	ナシ
内題	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	扉・直書〉帚木別注 又は雨夜談抄 扉・題簽〉帚木別注	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	扉・題簽〉源氏物語帚木巻別注	ナシ	ナシ	ナシ	巻頭〉はゞきゝの巻注	ナシ	見返内側〉帚木別注	見返〉宗祇法師作	ナシ	ナシ	巻頭〉帚木別注 宗祇	巻頭〉帚木別注 宗祇	巻頭〉源氏帚木抄	ナシ	扉 帚木の「右傍に別」注 宗祇作	ナシ	ナシ
整理番号	913.36/4247	近/231/5	桃 7-102	A-0061	453-2	D913.36/ハ1	3-1586	502-32	ナシ	M-1	ナシ	ナシ	83/吉14	930-39	240-229	㊦ A/1-11/82-54	913.36/20-W	913.36/4121	155-205	213/231	黒川 86	桃 7-103	文学 4-27	91/ト18/1	21155/1/512.13	545/7/35	文庫 20/400

二、『帚木別注』諸本を分ける形態的特徴

本稿では、『帚木別注』諸本の網羅的考察を目的とせず、特に現存伝本間の複雑な関係性、ひいては本文系統分類等の問題を基本的に取り上げないこととして、その究明は別稿に譲る。とはいうものの、諸伝本の問題に触れずして底本の性格を明らかにすることも困難である。したがってここでは、細かい本文異同以前のレベルで、『帚木別注』諸本を大きく分ける主な形態的特徴を紹介するとどめ、その説明を進める中で三条西家本の位置がある程度見えてくるようにしたい。

管見の限りでは、宗祇『帚木別注』の伝本は現在二十七本が確認され、〈表1〉にその基本情報をまとめてみた。各所蔵先を挙げてそれに因んだ略語を私に振り、その外題、内題、また機関付与の整理番号を示した。当該表の中でこれまで取り上げられ、翻刻されたものは僅か数本で、またいずれも他伝本に及ぶような考察の対象とされてこなかった。¹⁾『続群書類従』(⑤群)はさることながら、その他は唯一宮内庁書陵部桂宮本(⑧桂)が翻刻され、²⁾同翻刻で対校本に国立国会図書館本(⑳国)が使用された程度である。一方で、近年、画像公開が目覚ましく進み、翻刻紹介されるに先立って多くの本がすでに公に提供されることとなった。総合的に、『源氏物語』注釈史における『帚木別注』の重要性と特異性を考えたとき、驚くべき状況といえる。

以下、この停滞した研究状況の打開に向けて、伝本の形態的要素に限っ

た初歩的な調査報告ではありながら、〈表2〉～〈表4〉で二十七種の現存伝本を分けるいくつかの顕著な特徴に沿って、三条西家本をはじめ各本の個性を俯瞰できるようにしてみた。

イ、所収内容の相違

まずは〈表2〉で各伝本の所収内容の特徴を一覧できるようにした。その構成は三部から成り、(1)二頁にわたる〈表2①〉では『帚木別注』百十あまりの注記に通し番号を振って、伝本ごとにおける各注記の収録状況を示し、続けて〈表2②〉と〈表2③〉でそれぞれ(2)各本収載の附属的内容(奥書、識語等)と(3)各本の主たる形態的特徴(外内題の別、立項方針等)を明らかにしてみた。

〈表2①〉から確認されるのは、注釈書の系統分類において目安となりやすい項目の出入りを基準としてみても、『帚木別注』の場合さほど有用ではないという事実である。当該表が対象としなかった衍文・脱文等の本文異同を別として、絶対値からみても諸本に脱落した要素がそもそも少なく、また数本に共有された脱落も更に少ない。唯一伝本を分類する目安となりそうな項目の有無が、表末尾にみえる一四番注記のみである。一伝本群として、三条西家本を含む三陽伊稻群城六本(①～⑥)が当該注記を載せないほか、ほとんどは(他本に珍しい)「雨夜談抄」の題を持ち、また、宗祇による奥書をほぼ共通して載せない。但し、三条西家本は(「本云」との傍記を添えて)同奥書を有する。

表2 『帚木別注』 諸本所収注記等一覧 (基準底本：天理図書館蔵三条西家旧蔵本)

① |

×：欠

▲：一部欠

網掛け：錯簡

伝本 注記 番号	底 三	② 陽	③ 伊	④ 稲	⑤ 群	⑥ 城	⑦ 神	⑧ 桂	⑨ 丸	⑩ 京	⑪ 成	⑫ 金	⑬ 吉	⑭ 紀	⑮ 河	⑯ 春	⑰ 写	⑱ 天	⑲ 宮	⑳ 国	㉑ 黒	㉒ 桃	㉓ 宣	㉔ 斯	㉕ 静	㉖ 九	㉗ 地		
1													▲	▲	▲												▲		
2																													
3																													
4																													
5																													
6																													
7																													
8																									▲				
9																													
10																													
11																									▲				
12																								▲		▲			
13																								▲					
14																													
15																													
16																									×				
17																													
18																													
19																													
20																													
21																												▲	
22																												×	
23																												×	
24																												×	
25																													
26													▲																
27													×																
28													×																
29													×																
30													▲																
31																													
32																													
33																													
34																									▲				
35																													
36																													
37																													
38																													
39																													
40																													
41																													
42																													
43																													
44																													
45																													
46																													
47																													
48																													
49																													
50																													
51																													
52																													
53																													
54																													
55																													
56																													
57														▲															
58																													
59																													
60																													

伝本 注記 番号	底 三	② 陽	③ 伊	④ 稻	⑤ 群	⑥ 城	⑦ 神	⑧ 桂	⑨ 丸	⑩ 京	⑪ 成	⑫ 金	⑬ 吉	⑭ 紀	⑮ 河	⑯ 春	⑰ 写	⑱ 天	⑲ 宮	⑳ 国	㉑ 黒	㉒ 桃	㉓ 宣	㉔ 斯	㉕ 静	㉖ 九	㉗ 地
61																									▲		
62																											
63																											
64																											
65																											
66																											
67																											
68																											
69																											
70																											
71												▲															
72								▲				×															
73								×				×								▲							
74								×				×								×							
75								×				×								×							
76								▲				▲								▲					▲		
77																											
78																										▲	▲
79																											
80																											
81																											
82																											
83																											
84																											
85																											
86																											
87																											
88																											
89																											
90																											
91																											
92																											
93																											
94																											
95																											
96																											
97																											
98																											
99																											
100																											
101																											
102																								▲			
103																											
104																											
105																											
106																											
107																											
108																											
109																											
110																											
111																											
112																											
113																											
114	×	×	×	×	×	×																					

② | 宗奥＝宗祇奥書あり 兼作＝兼載『分別の事』あり 他記＝その他の奥書・識語等あり（○：附載）

宗奥	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
兼作																											
他記				○		○	○	○	○		○	○	○										○			○	

③ | 雨題 雨夜系題あり 帯題 帯木系題あり 一書 一ツ書き項目あり 識歌 引用和歌本文の書き分けあり

雨題	○	○	○	○	○			○	○																		
帯題						○	○				○	○	○			○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
一書											○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
識歌	○	○	○	○				○	○			○	○			○											

また、出入りの問題とは異なりながらやや近いケースとして、宗祇の『源氏物語』総論とも呼べる内容が展開される長文の一番注記が挙げられる。その冒頭の一部が欠落した状態が吉紀河三本(13)~(15)に共通するのみならず、その欠落範囲も一致している。更に九一本(26)にはより大幅な欠落が見られる。加えて、四本共にその切れ目が整っていて文章の途中から欠落しているのではないことから、後代の意図的な改変の結果とも考えうる。但し、同四本の他の形態的要素は必ずしも一致するわけでもなく、一小群として認めがたい。³⁾

かくして基幹注記の掲出には多くの差異を見出しがたいが、続く〈表2②〉に確認できるそれ以外の所収内容からは、伝本間に特徴的な分布を見せる要素はなくもない。その筆頭に、多くの伝本に合写されている、兼載による『光源氏物語定家の本河内本の分別の事』(17写の内題)という作品の有無が挙げられよう。春写天宮国黒桃宣八本(16)~(23)が当該作を載せ、その上でいくつの特徴を共有する別の伝本群を成している(少々の例外を除き「帚木」系の題、一ツ書き立項、宗祇奥書の附載)。

これ以外にも例えば、諸本からいくつかの奥書や識語の類を見出せるものの、他本と共有されるケースはほんの僅かしかない。⁵⁾ 総合的にみて、伝本間の本文異同こそ数多く確認されるが、構成要素の次元で各本の特性を求めることには限界がある。その中で、三条西家本を含む一群の輪郭は幾分かはっきりした方といえよう。⁶⁾

〈表2〉末尾の〈表2③〉では所収内容自体から所収注記の立項方針

に焦点を移し、伝本ごとの状況を端的に示したが、以下〈表3〉~〈表4〉を見ながらその詳細を述べることにする。

ロ、立項方針の違い(一)——一ツ書き掲出の有無と分布

〈表3〉では、内容とは別の形態的要素として、項目ごとに「一」と識別のために振っていく、所謂「一ツ書き」という立項方針を対象に選んだ。当該表で伝本間のその分布を俯瞰できるようにした。但し、その範囲は同現象を確認できる成金吉紀河春写天宮国黒桃宣十三本(11)~(23)の伝本に限るため、底本(三条西家本)を含む上述一群の伝本は含まれない。

まさきにこの表から浮かび上がってくるのは、こういった形態的特徴が諸本間でよく共有されているということであろう。『帚木別注』一一四の注記項目の中で、一ツ書きで掲出される項目の分布を見渡すと、ほぼ全注記に振っている伝本は僅か黒桃宣の三本(21)~(23)のみで、その他では注記の半分ほどに止まっていることが分かる。但し後者十本の中、一ツ書きで掲出される・されない箇所においては、伝本間に著しい一致が認められる。例えば、七八~九七番注記の間、十本揃ってほとんどは一ツ書きによる立項がないものの、例外的に掲出する二十箇所中の五箇所が完全に重なる。

表全体を見渡したとき、度重なる数世紀分の書写行為を経てもなお、落ちやすいと思われる「一」一文字のこの分布には、驚くほどの安定し

表3 一ツ書き項目の分布一覧（該当伝本のみ）

無記：一ツ書きあり ×：一ツ書きなし =：一ツ書き見せ消し ▲：不立項 ■：欠落

伝本 注記 番号	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓
成	金	吉	紀	河	春	写	天	宮	国	黒	桃	宣	
1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
2											×		
3													
4											×		
5													
6													
7											×		
8													
9											×		
10													
11													
12							×						
13	×	×	×			×							
14	×	×	=			×							
15													
16	×	▲	×			×							
17													
18													
19													
20													
21													
22													
23													
24													
25													
26													
27		■											
28		■											
29		■											
30		■											
31													
32													
33													
34													
35												×	
36		×	×	▲		×	×	×	×	×			
37													
38													
39		×	×	×	▲								
40													
41		×	×			×	×	×	×	×			
42	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	■		
43	×	×	×		×	×	×	×	×	×	■		
44	×	×	=	×	×	×	×	×	×	×	■		
45	×	×	×	×	▲	×	×	×	×	×			
46						×	×	×	×				
47											×		
48													
49													
50	×	×	×			×	×		×	×	×		
51													
52	×	×	×	×	▲	×	×	×	×	×			
53	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
54	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
55	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
56												×	
57	×	×	×	×	×		×	×	×	×			
58	×	×	×	×	×		×	×	×	×			
59	×	×	×	×	×		×	×	×	×		×	
60	×	×	×	×	×		×	×	×	×			

伝本 注記 番号	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓
成	金	吉	紀	河	春	写	天	宮	国	黒	桃	宣	
61	×	×	×	▲	▲	×	×	×	×	×	×	×	×
62	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
63	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
64	×	×	▲	▲	×	×	×	×	×	×			
65	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
66	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
67	×	×	×	▲	×	×	×	×	×	×			
68	×	×	×	▲	×	×	×	×	×	×			
69	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
70	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
71	×	×	×	×	×	▲	×	×	×	×			
72	×	■	×	×	×	×	×	×	×	×			
73		■		×									
74	×	■	×	×	×	×	×	×	×	■			
75	×	■	×	×	×	×	×	×	×	■			
76	×	■	×	×	×	×	×	×	×	■			
77	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
78	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
79	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
80													
81												×	
82	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
83	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
84	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
85	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
86	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		▲	
87	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
88	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
89													
90												×	
91	×	×	×	▲	×	×	×	×	×	×			
92	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
93	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
94	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
95													
96	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×			
97	×	×	×	▲	×	×	×	×	×	×			
98													
99													
100													
101													
102													
103													
104													
105													
106													
107													
108					×								
109													
110													
111													
112													
113													
114													

※1 「不立項」とは、前項目の注記本文に続けて書写されたため、独立した項目とならなかった、という事情を指す。結果として一ツ書きがないものの、積極的な無表記とも異なるため、別に扱う。

※2 本表でいう「欠落」とは、①注記全体の欠落例と、②（一ツ書き表記の有無を確認できる）注記の冒頭部分のみの欠落例とを両方含む。

た項目様式の継承が確認される。同時に形態的要素を重視する分類方法の有効性の傍証となる。なお、上述の兼載『分別の事』を附載する八本には例外なく、一ツ書きの掲出も認められる。その一方で、どちらのいわば付加的な要素も三条西家本を含む伝本群には確認できない。注目に値する対立であり、また後者の性格を知る上で重要な手がかりとも考えられる。

ハ、立項方針の違い（二）―引用和歌本文の掲出方法

続く〈表4〉で、一部の例外を除いて『帚木別注』諸本に認められる、掲出におけるもう一つの形態的特徴を取り上げた。今度は内容とも関連して、注記項目が『源氏物語』所収和歌を対象とした時に適応される、引用散文との識別を図った書き分けの現象である。伝本間に様々な方針が見られるが、表から各本の傾向を一覧して把握できるように努めた。

『帚木別注』はもとより、室町期の多くの注釈書のように、『源氏物語』から不審のある本文箇所を一部引用し、一、二字を下げてそれに対する筆者の釈文を示すという体裁を踏襲している。しかしそれ以上に、『帚木別注』諸本には更に和歌と散文の引用を区別して掲出する傾向があるようである。全文を詰めて書き記す静一本(25)を除いて、程度の差こそあれ、現存伝本のすべてにこうした区別が確認できる。

具体的には、引用散文・引用和歌・注記本文の三要素を掲出する際、要素ごとの改行はほぼ全本に共通するが、主として引用和歌における字

表4 注記における引用和歌本文の掲出方式（該当注記のみ）

○：引用本文と同様に掲出 ・：注記本文と同様に掲出 ▲：識別して引用&注記本文の間に掲出
■：引用&注記本文を両方同様に掲出 ×：欠落 網掛け：本文に続けて（改行等せずに）掲出

伝本 注記 番号	和歌 連番	底 三	② 陽	③ 伊	④ 稲	⑤ 群	⑥ 城	⑦ 神	⑧ 桂	⑨ 丸	⑩ 京	⑪ 成	⑫ 金	⑬ 吉	⑭ 紀	⑮ 河	⑯ 春	⑰ 写	⑱ 天	⑲ 宮	⑳ 国	㉑ 黒	㉒ 桃	㉓ 宣	㉔ 斯	㉕ 静	㉖ 九	㉗ 地
61	1	▲	▲	▲	▲	・	・	・	▲	○	・	・	▲	○	・	・	○	○	○	○	○	■	■	・	・	■	○	○
	2	▲	▲	▲	▲	・	・	・	▲	○	○	・	▲	○	○	・	○	○	○	○	○	■	■	・	・	■	○	○
78	3	▲	▲	▲	▲	・	・	▲	▲	○	○	・	▲	▲	○	○	○	○	○	○	○	■	■	・	○	■	×	×
	4	▲	▲	○	▲	・	・	▲	▲	○	○	・	▲	▲	○	○	○	○	○	○	○	■	■	・	○	■	○	○
86	5	▲	▲	▲	▲	・	・	▲	▲	○	○	・	▲	▲	・	○	・	○	○	○	○	■	■	・	・	■	・	○
87	6	▲	▲	▲	▲	・	・	▲	▲	○	○	・	▲	▲	○	○	○	○	○	○	○	■	■	○	・	■	○	○
88	7	▲	▲	▲	○	・	・	○	▲	○	○	・	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	■	■	○	・	■	○	○
94	8	▲	▲	○	○	・	・	○	▲	○	○	・	▲	▲	○	○	○	○	○	○	○	■	■	○	○	■	○	○
	9	▲	▲	○	○	・	・	○	▲	○	○	・	▲	▲	○	○	○	○	○	○	○	■	■	○	○	■	○	○
110	10	▲	▲	▲	▲	・	・	○	▲	○	○	・	▲	・	○	・	○	○	○	○	○	■	■	・	○	■	○	○
114	11	×	×	×	×	×	×	×	▲	○	○	・	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
114	12	×	×	×	×	×	×	・	・	・	・	・	▲	▲	・	▲	○	○	○	○	○	○	○	○	・	■	・	○

下げによっていくつかのパターンに分類できる。しかしながら「一ツ書き」と違い、形態的特徴として不安定のように、同じ一本の中でも複数のパターンが併存するケースも少なくない。

とはいうものの、このような伝本内の不統一がありながらも、〈表4〉から分かるように、**丸京紀河春写天宮国九地十一本**（⑨～⑩、⑭～⑳、㉔～㉕）、つまり多くの伝本は引用散文と引用和歌を同様に掲出し、字下げもなくその区別を改行で示すような立項方針を基本とする。少数派として**群城成三本**（⑤～⑥、⑪）は反対に引用和歌を注記本文と同様に字を下げて示す方針を取る。なお、注記本文と引用本文を同じ書式で掲出する**黒桃静三本**（㉑～㉒、㉓）はこの分類の仕方では問題外となる。

これに対して底本は、引用本文を行頭から、引用和歌本文を一字下げで、注記本文を三字下げで示すといった周到な書き分けを施している。**三陽伊稻桂金六本**（①～④、⑧、⑫）で基本的な方針とされ、また**神吉二本**（⑦、⑬）にも一部確認できる。伝写の過程で脱落してしまいそうな要素にしては、印象的な継承状況といえよう。また、〈表2〉～〈表3〉に見出してきた様々なグループ化をはみ出す現象としても、系統分類の観点から注目に値する要素であろう。

他の多くの点において異なる数本に共有されるこのような形態的特徴については、『**帚木別注**』の古態に遡る要素とも想像されるが、調査のこの段階では可能性の領域を出ない。ただし、対立しがちな諸本を結ぶものとしても重要な特徴であつてみれば、底本を含む伝本群にそれが一番多いという事実も特別な意味を持つことになろう。そして、その群を

代表する三条西家本の資料的価値にも影響しよう。

三、まとめ―諸伝本の中の三条西家本の位置付け

上記により、三条西家本およびその属する伝本群の特徴を以下のように端的に纏められよう。

- ①「雨夜談抄」という外題をはじめ、底本はいくつかの特徴を共有する一伝本群に属している。
- ②この特徴の中で、最終となる一一四番注記（第一注記を一部繰り返すだけのもの）を附載せず、宗祇による奥書をもほとんど載せないという傾向がある。いずれも他本に珍しい。
- ③同時にこの伝本群には、他の多くの『**帚木別注**』伝本に共有されている、付加的ともいえる要素が見つからない。その筆頭に一ツ書きの項目様式と兼載作『光源氏物語定家の本河内本の分別の事』の合写が挙げられる。
- ④最後に、三条西家本が属する伝本群には、別の（通常は対立しているような）伝本群に部分的にも認められる、いわば越境的な要素を共有している場合もある。この中で注目に値するのは引用和歌本文の書き分けである。

右を総括すると、三条西家本が所属する伝本群は①からして高い統一性を持つのみならず、②からすれば他本に広く共通したいくつかの要素

を持たず、その有りようが一見、『帚木別注』の古態に迫る印象すら抱かせる。その裏付けとしては、③の、三条西家本等が追加的と思われる要素を他本とあまり共有していないという点もあり、また逆に④のように、対抗伝本群を越えた要素を共通して継承しているという点も挙げられよう。詳細は今後の調査に委ねるほかないが、いずれをとってみてもその他本との多角的な関係性には古態の残影を窺えるのではないかと思う。ともあれ、底本の資料的価値の高さは自明であろう。

今後、悉皆調査を継続して全本の校異収集、相互本文関係の分析、系統の分類等といった多くの課題に取り組んでいきたいが、『帚木別注』諸本調査の中間的成果であり上記課題の解明にも益する資料として、本稿に天理大学附属天理図書館蔵三条西家旧蔵本の翻刻を提供する次第である。

〔注〕

- (1) 拙稿『源氏物語』が語るもの―宗祇『雨夜談抄』が開拓する「読み」とその意義」『第三十八回 国際日本文学研究会会議録』(二〇一五年三月) 一九～三四頁では本文異同に触れ、のちに稿者の学位論文『Medieval Commentaries on the Tale of Genji, 1367-1500: Figuring a Classic』(スタンフォード大学、二〇一九年三月) 一五四～一五七頁で諸本の多様性とその意義を問題としたが、それ以上の考察に及ばなかった。また、近年は川渕紗佳氏が『雨夜談抄』考―宗祇の『源氏物語』注釈態度を中心に―『詞林』第

六九号(二〇二二年四月) 四九～六四頁において、諸本一覽を作成し伝本整理の試みを初めて公開したが(六二～六三頁)、同論旨自体に伝本の問題が関わらなかった点もあり、諸本の考察はのちの課題として残された。

なお、本稿の諸本整理は川渕氏のものとは異なるところも少なくないが、稿者は同氏の調査により⑨丸成文庫本(松本大氏個人蔵)の存在を知り、その教示に対してここに感謝の意を記しておきたい。

- (2) 中野幸一編『明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』源氏物語古註釈叢刊第四卷(武蔵野書院、一九八〇年十二月) 六一三～六三八頁(翻刻)、六四四～六四五頁(解題)。

- (3) 拙論『早稲田大学図書館伊地知鉄男文庫蔵『帚木別注』の増補注記(翻刻)』『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』第四八号(二〇二二年三月) 二八八～三五四頁で示したように、地一本(27)には同注記の意図的改変が認められ、巻頭の書き出しも吉紀河三本(13)～(15)と同じくするが、その事情は欠落によらず、同注記の内容を一部並べ替えた結果である。

- (4) 写天宮国四本(17)～(20)はおおむね丁面の行数と改行箇所までも一致し、また黒桃二本(21)～(22)にも同様な著しい類似度が確認される。本数はあるものの、系統分類における同群の妥当な重さについては、慎重でなければならない。

- (5) 例えば、群城二本(5)～(6)には同じ短文の奥書が見つかる。

- (6) その共通特徴からして同群に神桂二本(7)～(8)を含むべきとも

考えられるが、本文異同とも関わる問題なので、やはり別稿に譲る。

- (7) 特に(多くの要素において底本と対立する) 金一本(⑫)に三条西家本と同じほどこいう書き分けが施された事情は興味深い。古写本と考えられる当該本については、一戸渉「金沢大学日本語学日本文学研究室所在古典籍目録稿」『金沢大学国語国文』第三八号(二〇一三年三月)七五〜八七頁に詳しい(七九〜八一頁)。

〔付記〕

- ①底本の翻刻にあたって閲覧・複写・掲載の許諾を賜った天理大学附属天理図書館に、心より深謝申し上げる(掲載許可番号…天理大学附属天理図書館本翻刻第一四一八号)。

- ②合わせて、本稿の大前提となる、『帚木別注』諸本の調査にあたり、閲覧・撮影、複写等を許可してくださった以下の所蔵機関の格別のご高配に對し、厚く御礼を申し上げます。

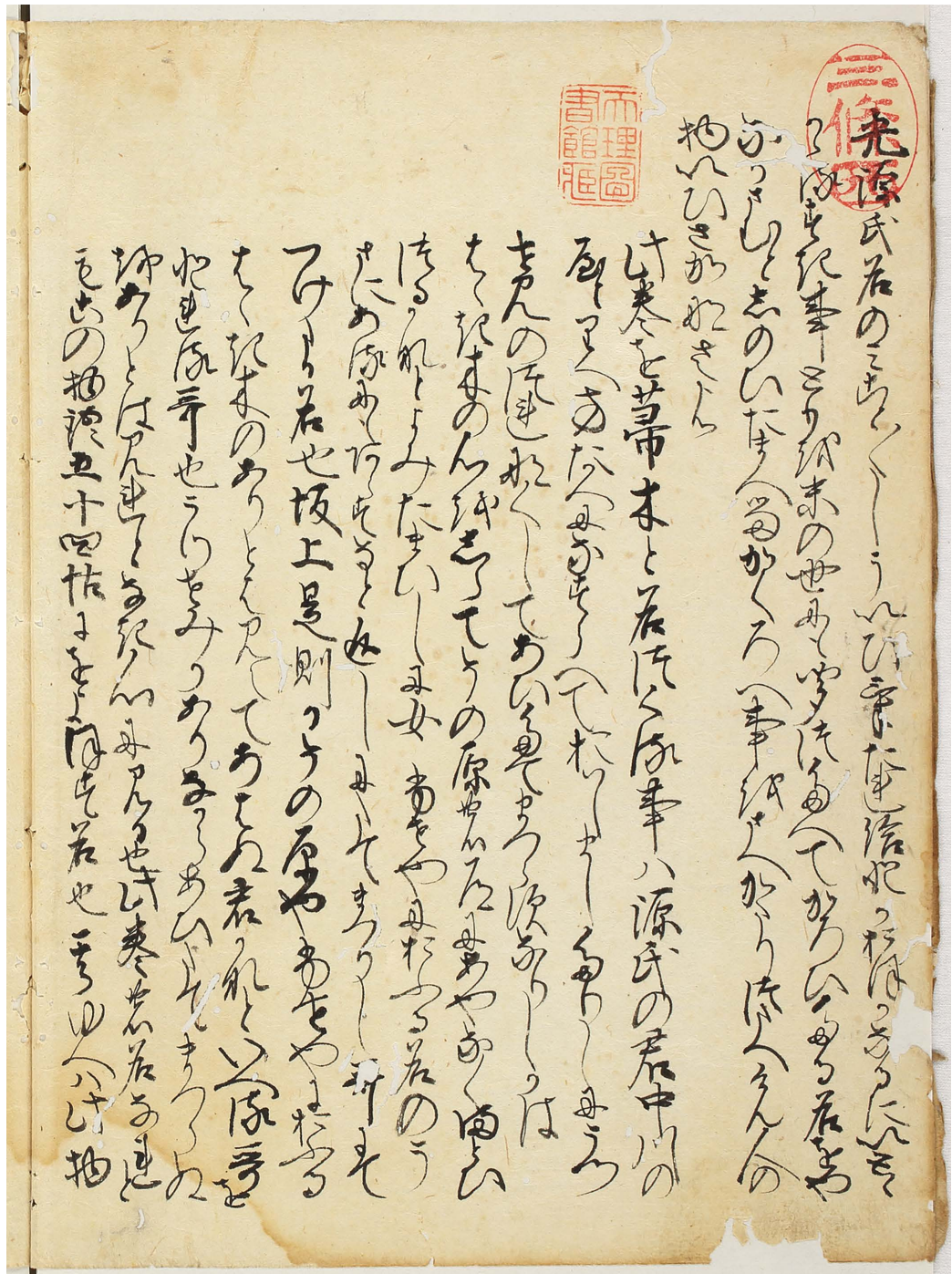
天理大学附属天理図書館、東海大学付属図書館、安田女子大学安田女子短期大学図書館、宮内庁書陵部、宮城県図書館、京都大学大学院文学研究科図書館、石川武美記念図書館成實堂文庫、金沢大学日本語学日本文学研究室、和歌山大学附属図書館、東北大学附属図書館、龍谷大学大宮図書館、国立国会図書館、実践女子大学実践女子大学短期大学部図書館、本居宣長記念館、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、静嘉堂文庫、九州大学附属図書館、早稲田大学図書館。

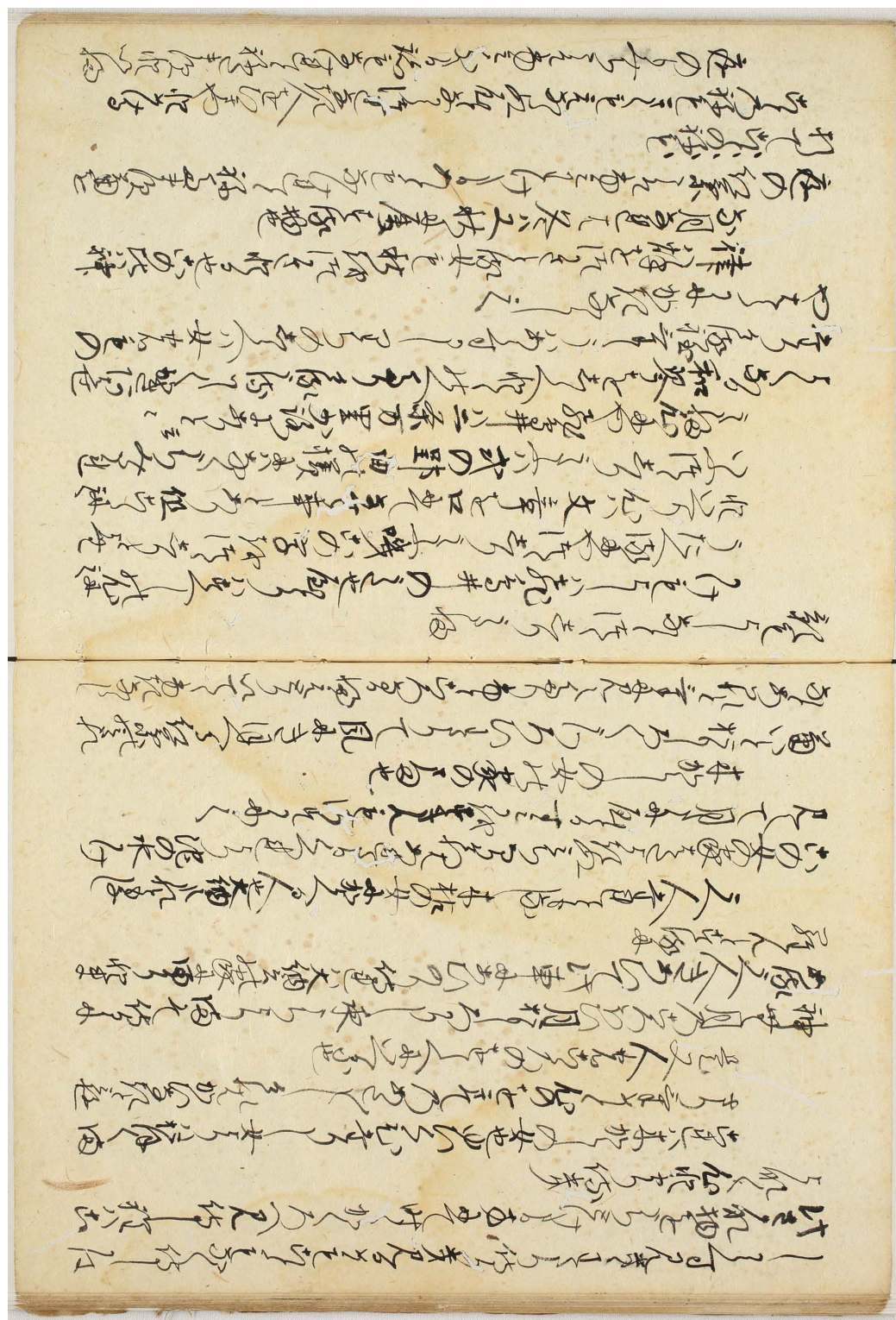
また、架蔵本の写真を共有してくださった松本大氏に対しても、感謝の意を述べたい。なお、陽明文庫本と神宮文庫本については、国文学研究資料館に収蔵される両本の紙焼き写真(陽:E2830、神:E3611)及びマイクロフィルム(陽:55-117-9、神:34-4694)に拠った。

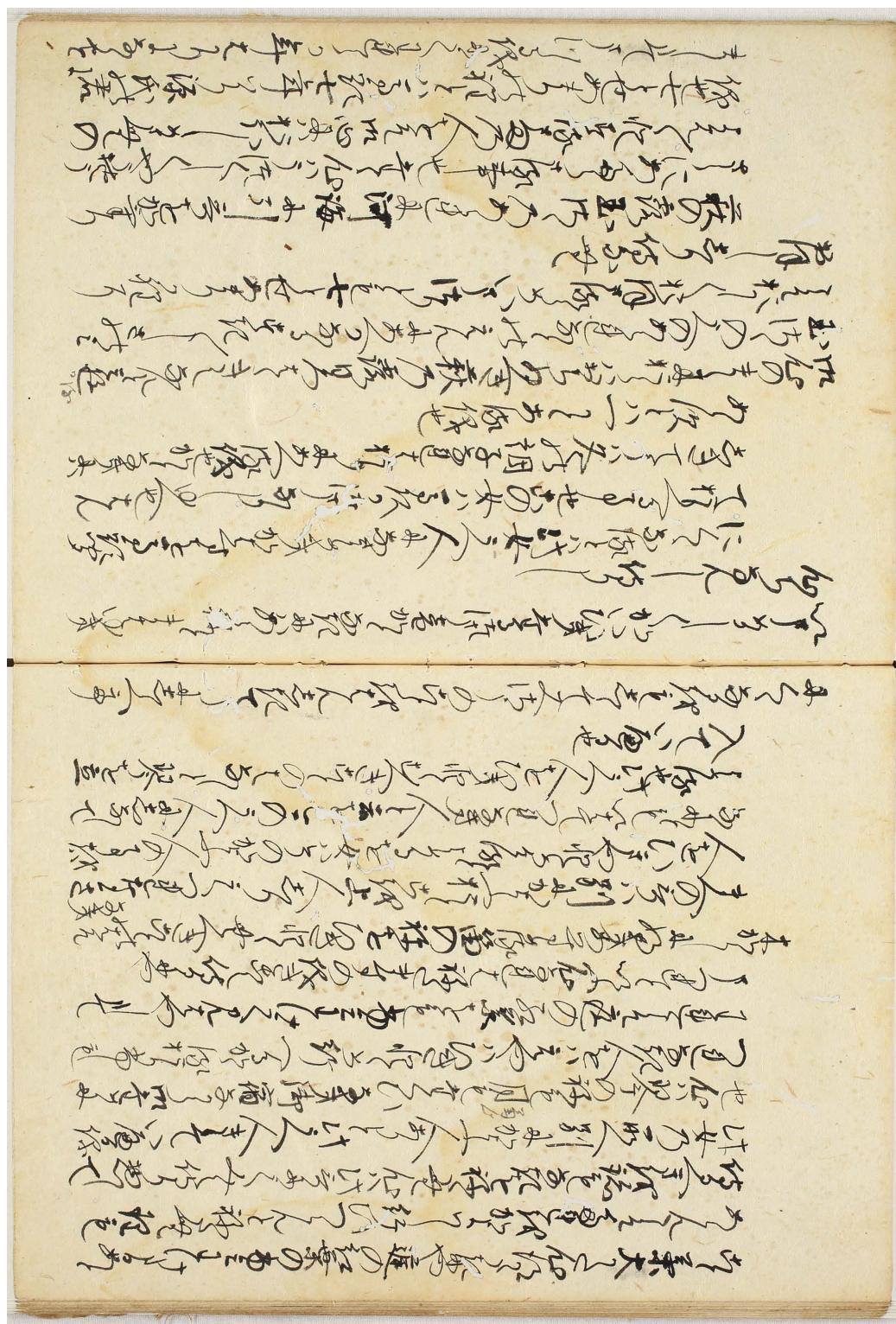
- ③本稿は科学研究費補助金 JP21K12939 による研究成果の一部である。

図版1 表紙










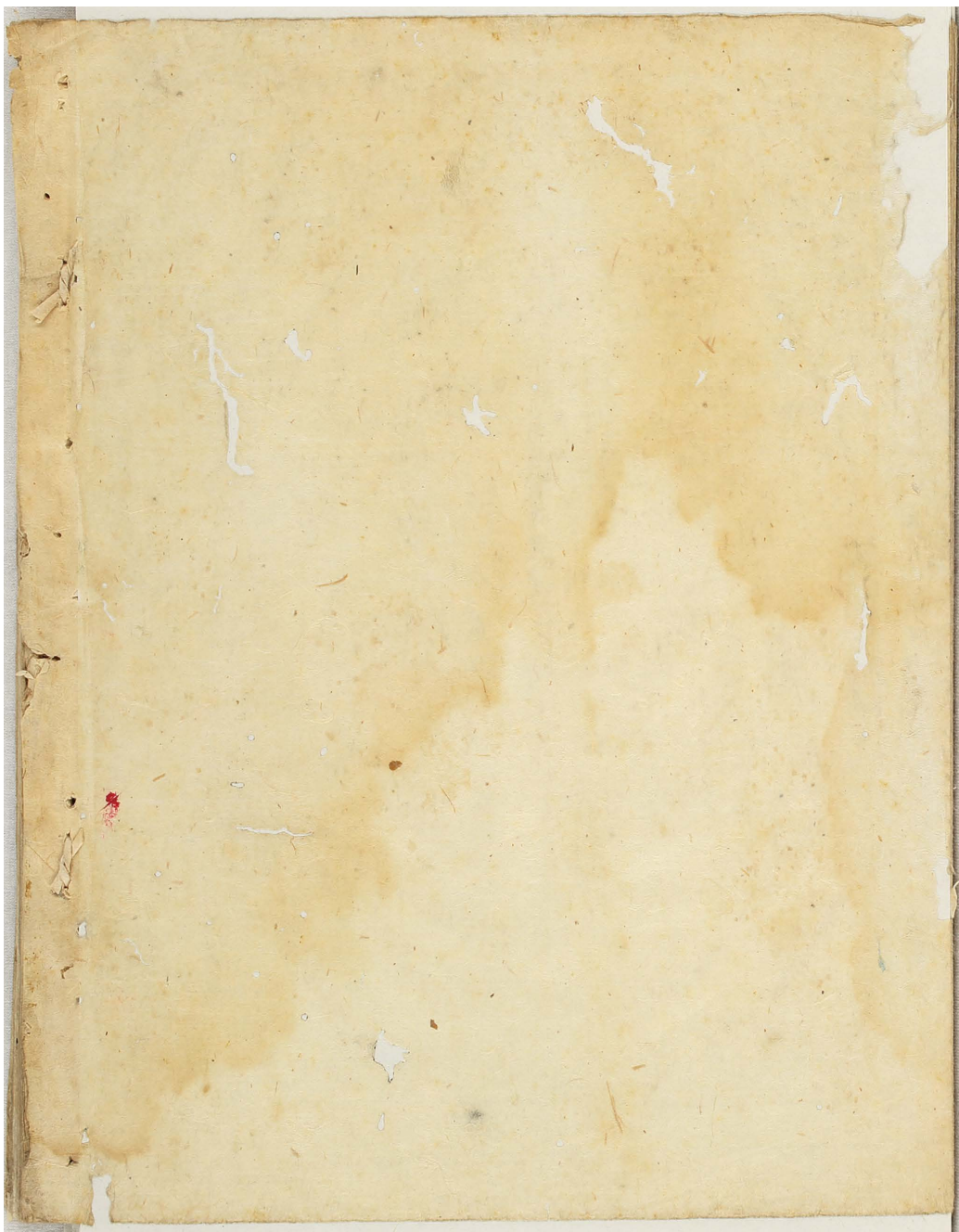
その原（筆）をくぐり知れしとて懐くの多故うきろこ
 向けよあねはるの族あり
 ちんちん親子といぬむせ小君とかげ源氏のまゝの好野
 せほらの松たれよりさだめらん人分とはき源氏に介
 つまみあるふたれはもうあひ終い人を作らざる年
 と小君母のおもひありういのわかれといひしとき
 事せぬはつと下をもくありありなり
 まよといひし木杓をきりて懐くつあるなり
 尺の伊との介よきそも所なれつりぬると小君
 るくくれとせん歌で好野肉多なり

[illegible]

^天文明_七の心ゆめはぐれに鬼女子を
さうし通つたりきそなり事なき人
羅んふ

宗祇

図版 8 裏表紙



〔凡例〕

一、本稿は、宗祇『帚木別注』の全文翻刻で、天理大学附属天理図書館三条西家旧蔵本「雨夜談抄」（九一三・三六／イ二四七）を底本とした。

一、翻刻の基本方針として、組版上の限界はあるものの、原本の様子をなるべく再現してみた。

一、なお、必要に応じて、稿者注を角括弧「」で示した。

〈書式〉

一、丁変わりを全て示し、「」の記号で表したが、組版の都合もあり、各丁最終行の末尾で一回改行して、その表示を次行に回すこととした。

一、改行箇所を全て原本のままとした。ただし、一行に書き切れなかった数文字分を行末の横に追い込んでいる場合、原本の通りに表記せず、むしろ書写者の行配り意識を尊重して一行書きとした。

一、底本に従い、引用本文和歌を一字下げ、注記本文を三字下げとした。

一、文字表記は、基本的に原本のままとしたが、漢字は概ね通行の字体に改めた。なお、例外的に異体字等を残した場合もある（「哥」等）。

一、虫損等で判読が困難な場合、当該箇所を推定字数分の□で表記した。

一、虫損等で摩滅した文字を残画から判読できる場合、囲い線を付した。

一、虫損等で摩滅した文字の判読に迷う場合、ルビで稿者推定を示した。

一、校合・訂正の跡は、逐一翻字し、傍記等の位置もなるべく再現した。

一、例外的に見せ消ちは原本での表記を問わず二重消し線に統一した。

一、重ね書きとみえる箇所は、元の文字が判読できる場合、ルビで▲の記号を付してそれを角括弧に示した。

右の如く、底本をできるだけ原本に忠実な形で提供すべく努めたが、同時に利用の便を図りつつ、以下のような工夫も施してみた。

〈標識〉

一、全一一三の注記に半角のアラビア数字の通し番号を振った。

一、この注記番号の直下に、参照しやすいように『源氏物語大成 校異篇』の該当する頁（漢数字）と行（丸付き数字）を丸括弧（）に示した。

一、右の注記番号と『大成』番号を本文と識別できるよう、各注記冒頭の右肩に一行空けて表示し、全てを四角で囲った。

〔例〕 115 (八〇⑩)

Ⅱ 『帚木別注』の一一五番の注記で、『大成

校異篇』八〇頁一六行目からの『源氏物

語』本文を解釈対象としている。

〈注記一覧表〉

一、底本所収注記の配分などを一覧できるよう、〔凡例〕に続けて各注記の（１）通し番号（２）原本における丁数（３）該当する『大成』頁行を載せた表を附した。

表5 天理大学附属天理図書館蔵三条西家旧蔵本「雨夜談抄」所収注記一覧

※『大成』＝『源氏物語大成 校異篇』該当箇所（頁：行）

注記	丁数	『大成』	注記	丁数	『大成』	注記	丁数	『大成』	注記	丁数	『大成』
001	1ウ	35:01	031	10ウ	42:02	061	19才	50:13	091	25ウ	59:05
002	3才	35:05	032	10ウ	42:05	062	19才	51:03	092	25ウ	60:01
003	3ウ	35:05	033	11才	42:06	063	19ウ	51:08	093	25ウ	60:08
004	4才	35:06	034	11ウ	42:11	064	19ウ	51:08	094	25ウ	60:08
005	4才	35:07	035	13才	43:07	065	20才	51:10	095	26才	62:05
006	4ウ	35:08	036	13才	43:09	066	20才	51:12	096	26ウ	62:08
007	4ウ	35:10	037	13ウ	43:12	067	20才	52:04	097	26ウ	62:10
008	4ウ	35:10	038	13ウ	43:14	068	20才	52:04	098	27才	63:02
009	5才	35:12	039	14才	44:05	069	20才	52:07	099	27才	63:12
010	5才	35:14	040	14才	44:06	070	20ウ	52:11	100	27才	65:02
011	5ウ	36:02	041	14才	44:09	071	21才	52:12	101	27才	65:12
012	5ウ	36:07	042	14ウ	44:14	072	21才	52:13	102	27ウ	65:14
013	6才	36:09	043	14ウ	45:07	073	21才	53:02	103	27ウ	66:04
014	6才	36:13	044	15才	45:09	074	21ウ	53:09	104	28才	66:08
015	6ウ	37:06	045	15才	45:11	075	21ウ	53:12	105	28才	66:12
016	7才	37:10	046	15ウ	45:12	076	21ウ	54:01	106	28才	68:06
017	7ウ	37:12	047	15ウ	46:01	077	22才	54:03	107	28才	68:13
018	8才	39:03	048	16才	46:03	078	22才	54:07	108	28ウ	70:05
019	8才	39:04	049	16才	46:06	079	22ウ	54:13	109	28ウ	71:08
020	8ウ	39:07	050	16ウ	46:07	080	23才	55:06	110	28ウ	72:03
021	8ウ	39:09	051	16ウ	46:13	081	23ウ	55:13	111	29才	72:10
022	9才	39:13	052	17才	47:02	082	23ウ	55:13	112	29才	72:14
023	9才	40:01	053	17才	47:04	083	23ウ	56:06	113	29才	75:07
024	9ウ	40:03	054	17ウ	47:09	084	24才	56:08	奥書	30ウ	—
025	9ウ	40:06	055	17ウ	47:13	085	24才	56:11			
026	9ウ	40:09	056	18才	48:08	086	24才	56:12			
027	10才	40:14	057	18才	48:14	087	24ウ	56:14			
028	10才	41:02	058	18ウ	50:01	088	24ウ	57:04			
029	10才	41:03	059	18ウ	50:03	089	25才	58:09			
030	10才	41:11	060	19才	50:07	090	25ウ	58:13			

光源氏名のみことくしういひけたれ給とかおほかなるにいと、
かゝるすき事ともを末の世にも聞つたへてかろひたる名をや
なかさむとしのひたまへるかくろへ事をさへかたりつたへけん人の
物いひさかなさよ

此巻を簾木と名づくる事は源氏の君中川の

やとりへ方たかへになすらへておはしましたりしにうつ

せみのつれなくしてあひたてまつらすなりしかは

は、き木の心をしらてその原の道にあやなくまとひ

つるかなとよみたまひしに女 ふせやにおふる名のう

さにあるにもあらずなと返しにたてまつりし哥にて

つけたる名也坂上是則かその原やふせやにおふる

は、き木のありとは見えてあはぬ君かなといへる哥を

とれる哥也うつせみかありなからあひたてまつらぬ

をありとは見れとなき心に見る也此巻の名なれと

もこの物語五十四帖にをよほす名也其ゆへは此物

「一ウ

語は作事にてなき事にはあれとも又むかしあり
こし事ともをおもかけにしてかける也まつ此物
かたりの桐壺の御門 朱雀院 冷泉院三代は
延喜 承平 天曆のみかとをかたり光源氏は
西宮左大臣高明公の太宰にうつされ給しを

なすらへたり此外源氏の君の左遷にはもろこ

しの周公旦の東征したまひし事白樂天か

事わか朝には菅丞相野相公在納言のためしを

よそへたり是のみならず所々に物をなすらふる事

かきりなしされは五十四帖はことくある物かと思

れはなくなき物かとすれはある物なれば此は、き木

一部の名になる物也天台に四門をたつる中にも

亦有亦空門この物語にあたり夢のうき橋の巻

も其一卷の名といへとも五十四帖の名になる物也

いかなとなれば此物かたりに上中下の人くもろくの

「二オ

行跡みな。のうちのたはふれなりたとへは莊

子が夢に胡蝶となりしらす又胡蝶か莊子と成る

かといふかことし此物語はいにしへの夢そともいひ

かたく此世にあるわれ人の今の身のうつゝともさため

かたくとも夢のわたりのうき橋は、き木のありなし

也されは紫式部の筆の跡その色ふかく其心はかり

なき物也さて此巻のはしめに光源氏といふより片野の

少将にはわらはれたまひけんかしと云までは物語の作者の

ことは也是のみならず紫式部のことは所々おほかるへし

名のみことくしくとは光源氏といふ名はいかめしうと

ほめたる心也いひけたれ給ふとかおほかるとは世に其名

たかく道のほまれある人をも世上にいひけつならひ也

かゝるすき事ともを末の世にも聞つたへてかるひたる名

をやなかさむとしのひたまふひけるかくろへ事をさへ

かたりつたへけん人の物いひさかなさよとは源氏の君は

「二ウ

好色の人なからおもては実を本として下には色

このむ心ましける也さるによりて世にしひたまふ

事を誰かかたりつたへけん紫式部か言也さるは世を

は、かりまめたち給ふける程なよひかにをかしき事は

なくて片野少将にはわらはれ給けんかしとは下の心は

好色にして上に実をたつるゆへになよひたる所のなきを

好色の本意にはあらずとかた野の少将はわらはんと

藤式部もおもひてかける也片野の少将の事色く

の義侍れと作物語にかたの、少将といふあり其人

かきりなき色このみ也き光源氏とかた野の少将とおなし

時代にはあらねとも紫式部とり合かくいへる也作物

かたりの人にてつくり物かたりの人に対する事おもしろく

かける也物也こゝまでは此一巻の序分也

002 (三五⑤)

また中将などに物し給しときは

源氏の君此巻にては十六歳官は中将也紅葉賀の

「三オ

卷に宰相にて中将もとのことし花のえんまでは

中将なりしかれば此卷までは勿論中将なるをまた中将
などに物したまひし時とかける事不審あるへき

事也しかはあれとかくかけるに心あり其ゆへは紫式

部此物語をかく事わかつくりたる物のやうになさすし

てむかしありし事ともをさま／＼につたへ聞し事を

書うつしなとしてとりあつめ一部にしたるやうにかけ

りさる程に卷々の末おほくそれをあらはせり

むかしの事にいへる物なれば中将などに物し給ひし

の過去のしうたかひなき物也たとへは伊勢物語に

業平の極官を貞観年中にかけるは彼物かたり

なりひら没後に伊勢かけるゆへに極官をかきし

其たくひ也此儀を分別すれば不審なき物にや

003
(三五⑤)

うちにのみさふらひようし給ひておほみ殿にはたえ／＼まか
てたまふ

源氏の君左のおとゝの姫君あふひのうへをよすかとし

たまひし事は源氏十二歳の時の事也其時あふひの

うへ十六也すこし源氏のこゝろとまり給はぬゆへに大内
にのみありよくおほしておほひ殿へはたえ／＼まかて給

と見えたり

004
(三五⑥)

しのふのみたれにやとうたかひきこゆる事もありしかと

とは葵の上ゆかた。人わか方さまへうとくおはしませは

内にてこれかれに御心もうつるにやとうたかふ心也

005
(三五⑦)

さしもあためきめなれたるうちつけのすき／＼しさなどは

このましからぬ御本性にて

とはかやうに人のうたかひおもひしかと源氏の君の御心には

なひきやすき人にこゝろとめ給ふ事御なき御本上なる

によりさもなかりけると云儀なりおほん本上にてと

書すてゝみたれたまへる心はなしと云心をもたせてかけり
かやうにこと葉をいひすてゝをく事此物語におほかる

へしさるによりて幽にもきこゆる也

006
(三五⑧)

まれにはあなち引たかへ心つくしなる事を御心に覺し
と、むるくせんあやにくにてさるましき御ふるまひもうち
ましりける

まれにとはなひきやすきをきらふ。心御なれはすき心なき

やうなれと又とき／＼われになひきかたき人を心におもし
ろく覺すによりそのかたにてあるましきふるまひもあり

名のたつ事もあるなるへし

007
(三五⑩)

なか雨はれまなき比

五月はかりの事也

008
(三五⑩)

うちの御物いみさしつゝきていと、なかゐさふらひ給ふ
おほる殿にはうらめしく覺したれとよろつの御よそひ何くれと

内の御物いみとは禁裏の御物いみ也ものいみといふは

惟かましき事なとある時物いみと云字を書て簾

などにつけてありきなとをもせてつゝしむ事なり

「四ウ

なかゐさふらひ給とは内に久しくおはします心也よろ
つ。御よそひなにくれとはさうそくの何やかやと左のおほひ
殿より御心にいれ給ふ事也

009
(三五⑫)

御むすこのきんたちた、此御とのゐ所の宮つかへをし

給ふ宮はらの中將は中にしたしくなれきこえ給て

御むすこの君たちとは左のおとゝの御子とも也宮

はらの中將とは頭中將也極官は太政大臣若菜に

致仕してちしのおとゝといへり桐壺の御門の御いもう

とを左のおとゝえ給て御子ふたりもたまへりひとり

葵のうへひとり此中將也よりて宮はらの中將とはいふ

也源氏の君とはいとこにておはしますさるにより中にした

しくして学問をもあそひたはふれをも人よりはこゝろ

やすくし給と見えたり

010
(三五⑭)

右のおとゝのいたはりかしつき給すみかは此君もいと物うくして
すきかましきあた人也

「五オ

頭中将は右のおと、の御むこなるよし桐壺に見えたり

いたはりかしつき給すみかは此君も物うくしてとは右の

おと、の四君の方に頭中将かよひたまへとも心につかぬ事

也此君もとは源氏の葵上に御こ、ろとまらぬ事を

いはんとて此君もすきかましきあた人といへる也

011 (三六②)

君のいて入し給にうちつれきこえ給つ、夜ひる学問

をも遊をももるともおさくたちをくれす

これは源氏君と頭中将の中よくおはしてよろつ心の

うちをもかくしあへたまはぬ事也是かやかて

雨夜の物語の序なるへし

012 (三六⑦)

おほとなふらちかうて文ともなと見給つるてにちかき

御つしなる色くの紙なる文ともを引いて、中将

わりなくゆかしかれは

文。なと見給とは学問かたの文也色くの紙なる文とは

艶書の事なるへし

「五ウ

013 (三六⑨)

さりぬへきすこしは見せんかたはなるへきもこそとゆるし

たまはねはそのうちとけてかたはらいたしとおほされんこそ

床しけれをしなへたる大かたのは数ならねと程くにつけて

かきかはしつ、も見侍りなんをのかしいうらめしき

おりく待かほならん夕暮などのこそ見所はあらめとえんすれは

さりぬへきと云より源氏頭中将のたかひのことはにてあ

らはにきこえ侍りた、しえんすれはといひすてたる次

に源氏のことはあるへきを頭中将のことは也心得かたき

は文字也さりなからやすらかにいひすて、をく事^詞は此

物語のならひなれはそのたくひと見てをくへきにこそ

014 (三六⑬)

やんことなくせちにかくし給へきなどはかやうに大そうなる

御つしなとにうちをきちらし給へくもあらすふかくとりをき

たまふへかめれは是は二のまちの心やすきなるへし

頭中将源氏の方にある艶書を見給ふとていへる也人見

てもくるしからしとおほすをそこにはをき給ふらんと

「六オ

いふ心也二のまちは次のまちと云心也又やんことなくと

云より二のまちの心やすきと云まては草子の地とも云へきにや
しかれはまへのえんすれはといひすてたるにもよろしきにや

015
(三七⑥)

女のこれはしもとなんつくましきはかたくもあるかなとやうくなん
見たまひしるた、うはへはかりのなさけにてはしりかきおり
ふしのいらへ心得てうちしなとはかりはすいふんによるし
きもおほかりと見給ふれとそもまことのその方を取りいてん
えらひにもるましきはいとかたくや

女のこれはしもと云より頭中将のことは也これはしもとは
是はと也なんつくましきとは難なきはあるましき心なり
やうく見給ひしるとは頭中将わかををはしなから世上の
女のさまを次第にしるの心也はしりかきとは女の文かきの
事おりふしのいらへとは哥よむ事也分にしたかひて
する物はあれと手かく人と云へくもなく哥よみといふ
へきもなきと云義なりこれよりしなさため也この

「六ウ

品さための事は世間の女のこゝろをおほく見あつめ

たる人か源氏の君にあひたてまつりて世にはかゝる心を

ある女もありとある心ある女もありと云をかたり奉る

事も頭中将は世をくはしくしり給程はなけれと源氏の君より

はすこしこのかみにて女のさまをもよくしりたまへる故に

かたりたまへる也大かた此巻は心得かたきにや侍らんと

へは当時も。老たる人は五十年六十年の間の

事を云とては其人のこゝろはかくこそありしか

さやうにこそ侍りしかと云かこときの事也それに

当時の人のこゝろこし方の人の心に似たるかあるか

ことし此ことはりにもつけはわつらひなくこゝろ

えらるゝ物なり

016
(三七⑩)

わか心得たる事はかりをのかししこゝろをやりて人
をはおとしめなとかたはらいたき事おほかり

是もまへのつゝきなれとかやうなる人あるよしの儀也

「七オ

017 (三七⑫)

かたちかたぢおかしくうちおほときわかやかにてまきる、事
なき程はかなきすさひをも人まねにこゝろをいる、事も
あるにをのつからゆへつけてしいつる事もあり見る人をくれ
たるかたをはいひかくしてさてありぬへき方をはつくるひてまね
ひいたすにそれしかあらしと空にいか、はおしはかりおもひくた
さむまことかとも見もて行に見をとりせぬやうはなくなんある
へきとうめきたるけ色も

是はしなされための第一也こゝろは人のむすめのかたち
をかしくわかやかなるやうの人の何にてもしいつるわさ。^{ある}を
云也ゆへつけてとはしせんきようありて也さやうなる人を
その方なる人のことくしくいへるか見おとりする事
あるよしをいへる也此段はすゑつむにあたる也末摘は
よろつをくれたる所をはしけれと琴をひき給しを

大輔の命婦か源氏の君にかたり申たりし事よく
似たる也又此段のはしめにかたちおかしくわかやかなる程と

「七ウ

018 (三九③)

いへりすゑつむはかたちあしき人也ちかふやうなれと
ことくく似る事はなけれと一所なれと詮とする所
にたるをはそれにあたるといへる也

なりのほれともよりさるへきすちなぬは世の人の
おもへる事もさはいへとなをこと也

此段は源氏の君頭中将にとひたまへるはやんことなきか世くた
りたると下つかたの人のなりのほるとはいか、わくへきと
のたまへるをおりふし左の馬のかみまいりあへるか物よく
いふ人の世の中。^の人のありさまされる人なれば中将左の
馬頭にゆつりいはせらるゝ也こゝろはなりのほる人をは
世間より。昨日けふまで下臈にてありし人そなとおもひ
いへとすて。^にはや官位もあかりたるうへはおとすへきにあらす
と云事を猶こと也とは云也惟光女藤典侍これに
あたれり

019 (三九④)

又もとはやむことなきすちなれと世にふるたつきすくなく時

「八オ

世うつろひて覚えおとろへぬれは心は心としてことたらすわろ
ひたる事もいてくるわさなれはとりくことはりて中の
しなにそをくへき

是は末つむにあたる也さきにも末摘にあたるあれとそれは
しわざについて也これは種性のくたるたとへ也うつせみも
納言の子ながら受領の北方になれはあたるへきにや
此まへの段よりすゑまで大略馬の頭かことは也

020
(三九⑦)

又すりやうといひて人の国のことにかゝつらひいとなみて
しなさたまりたる中にもきさみくありて中のしなのけしう
はあらぬとりいてつへき比ほひ也

此品は軒はの萩にあたるなりころほひ。とは当時
すりやうの人のむすめに可然かおほきよし也

021
(三九⑨)

なまぐのかんたちめよりも非参議の四位ともの世のおほえ
くちおしからぬかやすらかに身をもてなしふるまひたると
かはらかなりや家のうちにたぬ事はたなかめるまゝに

「八ウ

はふかすまはゆきまでもてかしつけるむすめのおとしめかたく
おひいつるも又あるへし

非参議とは宰相。ならぬ人なるへしかはらかなりや
とはさはやかなる心也はふくとは省の字也はふかすとは
身より過たる事をもかへり見すしんしやうやかに
もてなしたる儀也これは明石のうへにあたる也

022
(三九⑬)

宮つかへにいてたちておもひかけぬさいわるとりいつるためしとも
おほかるかしなど

是はきりつほの更衣にあたれり

023
(四〇①)

もとのしな時代の覚えうちあひやんことなきあたりのうちく
のもてなしけはいをくれたらんはさらにもいはす何をして
かくおひ出けんといふかひなく覚ゆへし

これには女三宮あたれり朱雀院のみこにて六条
院の本台におはしけれと手などもあしくこゝろも
をくれたまへりし也

「九オ

024 (四〇③)

うちあひてすぐれたらんもこ□はりこれこそはさるへき事と
覚えてめつらかなる事と心もおとろくまし

やんことなき人の時の覚えもいかめしきか心もしわさも
うちあひたらんはもとよりの事なるへきの儀也薄雲
女院これにあたれり

025 (四〇⑥)

さて世にありと人にしられすきひしくあはれたらん葎の
門におもひのほかにはうたけならん人のとちられたらんこそ
かきりなくめつらしくは覚えめ

夕顔のうへこれにあたれり

026 (四〇⑨)

ち、のとしおい物むつかしけにふとりすきせうとのかほ
にくけにおもひやりことなる事なきねやのうちにいといたゞ
くおもひあかりはかなくしいてたる事わさもゆへなか
らす見えたらんかたとにてもいか、おもひの外におかしか
からさらん

是はしゆ姓させる人ならぬ人の中にもしかるへきか

「九ウ

あるへき心也かたかるとてとはかけたる中にもとる方の

有へき儀也これには藤式部かいもうとあたれり物

語のおもてにも見えたり

027 (四〇⑭)

いてやかみのしなとおもふにたにかたけなる世をと君は覚すへし
君とは源氏の御事也あふひの上ち、は左のおと、母
宮はみかとの御いもうとなれば上の品にはならひなけれと
源氏の君の御こ、ろにあはぬ所ありし儀也

028 (四一②)

ひもなともうちすて、

紐をさ、ぬ事源氏の君うち乱て物語き、給時の
様なり

029 (四一③)

女にて見たてまつらまほし

源氏の君を女に我なりて見たてまつらは猶たくひ
なくおもふへきのこ、ろ也此下詞あらは也

030 (四一⑪)

とすれはか、りあふさきるさにて
そへにとてとすれはか、りかくすれはあないひしらすあふさ

「一〇オ

きるさに此心そへにとは我か心に物をりやうけし

たる心也さやうにしてよからんとおもへはちかうさらは又
かやうにやせんとすれは又たかう事ある儀也あふさきる

さとは行さま来るさまのやうの事也只こなたかなた

物のちかふ世のならひ也それを女のうへのこゝはよしと思

へはかしこたかひかしこをよしと思へはこゝたかふ事に

引哥也

031
(四二②)

かならずしも我おもふにかなはぬねと見ぞめけるちきりはかりを

すてかたくおもひとまる人は物まめやかなりと見えさてたも

たるゝ女のためも心にゝをしはからるゝ也

此ことは男女のうへのみならず君臣朋友の中にも

大切なことは也

032
(四二⑤)

君たちのうへなき御えらひにはいかばかりの人かはたくひたまはん
ところせくおもひ給へぬにたに

馬頭おほくの人のうへをかたりて世にしかるへき

「一〇ウ

女のなき事を申さむとてかくいへる也所せく思ふ

給へぬにたにとは馬頭かわか身の事也所せきとは上

臆はよろつに身をやすらかにし給はぬ物なれは其身は

せはき儀也いやしき身は所せはき事なきよしなり

惣しての心はいやしき身にたに思ふにかなふ女はなきの心也

思ふたまへぬにたにといひて心をもたせて句をきりて

下へはつゝかぬことは也

033
(四二⑥)

かたちきたなくわかやかなる程のをのかししはちりも

つかしと身をもてなし文をかけとおほとかにことえりをし

すみつきほのかに心もとなく思はせつゝ又さやかにも見

てしかたとすへなくまたせわつかなる声きくはかりいひよれと

いきのしたに引いれことすくなゝるいとよくもてかくす

なりけりなよひかに女しと見ればあまりなさけに引こめ

られてとりなせはあためく是を始のなんとすへし

此一段のうち塵もつ〔かた〕しと身をもてなし文を

「一一オ

かけとことえりをしてと云所は伊勢のみやす

所なと是に似たるへしことえりとは詞をえる儀なり

御やす所は文かき上手にておはしける也これより下

とりなせはあためくといへるは木枯の女にあたる也はし

めのなんとすとは第一の難といふ儀也此段のつゝき

惣は一段なれとその事／＼のかはりめにそこはそれに

かれはこゝに似たる様の事あるへし

034 (四二⑪)

事か中になのめなるましき人のうしろ見のかたは物のあは

れしりすくしはかなきついでのなさけありをかしきに

すゝめる方なくてもよかるへしと見えたるに又まめ／＼しき

すちをたてゝみゝはさみかちにひさうなき家とうしのひ

とへにうちとけたるうしろ見はかりをしてあさ夕の出いりに

つけても大やけわたくしの人のたゝすまるよきあしき

事の目にも耳にもとまるありさまをうとき人にわさとうち

まねはんやはちかくて見ん人のきゝわきおもひしるへからんに

「一一ウ

かたりもあはせはやとうちもゑまれなみたもさしくみもしは

あやなき大やけはらたゝしく思あまる事なとおほかるを

なにゝかはきかせんとおもへはうちそむかれて人しれぬおもひ

いてわらひもせられあはれともうちひとりこたるゝに何事そ

などあはつかにさしあふきゐたらんはいかゝはくちおしからぬ

ことか中にとはとりわけなと云心也物のあはれを

しりなさけにすゝむかあしき事にてはななけれと

実なきはかひなければ実なる所をつよくそたてん

とていへることは也されとも又まめ／＼しきすちをたてゝ

とほうしろ見に心をいれてわか身をもやさしくもたす

みゝはさみかちにひさうなきをはきらふ。也みゝはさみ

とはひんのかみなどを耳にはさむやうの事也

見くるしきさま也家とうしとはさためたる妻

の事なりこのひさうなきと云には馬頭。ゆひくひたる

女あたる也されと彼女は見めかたはあしかりしかと身を

「一二オ

かきつくろひなとして心も下しうなかりしなり

朝夕のいていりにも大やけわたくし目にもみ、にも

とまる事をは我つまにこそかたらまほしきの心也大やけ

はらた、しきとは主人なともちたる身のその主⁽⁴²⁾に

うら見切なる時も又傍輩朋友なにくちをしと

思ふ事あるならひ也さやうならん時は心あるつまなど

にはかたりもすへきを心なき女などにはいひてもかひ

なきあまりに思いてわらひなとするあるへし思出わ

らひとはくちおしくおもひしあいてなとを心になんてう

それかなとおもひてそらわらひする事ある儀也あはれ

ともひとりこつとはあはれわか身くならはなと述懐の

事あるならひ也さやうに男のあらん時は女のこゝろにも

大かたの事にはあらしなとふかくおもひいれておとこ

をもなくさめなとすへき事なれと其心もなくてこ

とくしくこれはなそなと、あはくしくいひたらは

「一二ウ

口惜かるへき事也されは只つゐのよすかと思ふへき人は
。心。たらはてあしかりなん事を馬頭君たちにかたる
なるへし此段はさしすきたるをなためをくれたるをす、
めんとかける也

035 (四三(7))

た、ひたふるにこめきてやはらかならん人をとかくひきつく
ろひてはなとか見さらん心もとなくともなをし所あるこゝち
すへし

是は天性こゝろたてのおもふまゝなるはあるへくもなけ
れはかやうに又一段をかける也こめきとはちいさきにあらす
巨の字也おほきやかなる性を云也紫の上のおさな
おひなとこれにあたる也

036 (四三(9))

けにさしむきて見ん程はさてもらうたきかたにつみ
ゆるしつへし

心はいとをしき女なりとも立はなれておとこのために
いたりなくはあしかるへきの心也此心は前に侍りき

「一三オ

037 (四三⑫)

つねはすこしそはくしく心つきなき人のおりふしにつけていてはえするやうもありかしなど

そはくしく心つきなきとは心の事にあらず見め

かたちのよろしからぬ事をかくいへる也まほなるかたちと

いふはよきをいへはそれに対してそはくしくしきはあしき

也心つきなきとはかたちあしければ人のこゝろ。つかぬ

物なりかゝる人もおりふしいてはへするとはうちふる

まひの心たてにて人にまさる事のある儀也これには花ちる

さとよくあたれる也

038 (四三⑭)

今はたゝしなにもよらしかたちをはさらにいはいとくちおしく

ねちけかましき覺えたになくは只ひとへに物まめやかにしつかなる

こゝろのおもむきならんよるへをそつゐのたのみ所にはおもひをく

へかりけるあまりのゆへよし心はせよ^{うち}そへたらんをはよろこひ思ひ

をくれたる方あらんをもあなかちにもとめくはへし

あまりのゆへよしとは心たに実ならはそのあまりのゆへく

「一三ウ

039 (四四⑤)

しき事あらはよろこひにすへきの儀也

うしろやすくのとけき所たにつよくはうはへのなさけはをのつからもてつけつへきわさをや

是はあふひのうへにあたれり

040 (四四⑥)

えんに物はちしてうら見いふへき事をも見しらぬさまに忍

てうへはつれなくみさをつくり心ひとつにおもひあまる時はいはん

方なくすこきことのはあはれなる哥をよみをきしのはるへき

かたみをとゝめてふかき山さと世はなれたる海つらなどにはひ

かくれぬかし

これは伊勢物語になりひらのかたにありし女いて、いなは

心かろしといひやせんと云てうかれいてしやうなる事也

此物かたりには夕かほのうへ是にあたれり哥などをよみをき

たりし事はなけれど大かたの心たてよく似たるへし

041 (四四⑨)

わらはに侍りし時女房などの物かたりよみしを聞いていとあはれに

かなしく心ふかき事かなとなみたをさへなんおとしはへりし

「一四オ

今思ふいまおもふにはいとかるくしくことさらひたる事也

是は馬頭かわらはにてありし時といへりたとへは

此段にいへるやうの事を女房などのよみしをあはれに

き、しかあしき事なりけりと馬頭かおもひ返し

たる儀也此ことはりを君たちにしらせたてまつらんとて

いへるなり

042
(四四⑭)

心ふかしやなとほめたてられてあはれす、みぬれはやかて

あまになりぬかし思ひたつ程はいと心すめるやうにて世にかへり

見すへくもおもふおもへらす

こゝろさたまらぬ女のさま也是は古今におとこをうらみて

みつの寺にてあまに成てうきめをみつのなとよみし

こときの心也此下のこととははかゝる女の心たてをかける也

043
(四五⑦)

にこりにしめる程よりもなまうかひにてはかへりてあしき

道にもたゝよひぬへくぞ覚ゆる

此ことはの引哥にはちす葉のにこりにしまぬ心もて

「一四ウ

何かは露を玉とあさむく此哥あひたりとも見えぬをあは

せやう侍る也たとへは蓮はまつにこりにそみてしかも

しまぬ物也あまになる物はいこりにそまぬやうなれと心は

濁にそみたる物也しかればかゝる人は蓮のにこりに

しめるよりもなまうかひなるへきの心也されはあしき

道にもたゝよひぬへしと云也

044
(四五⑨)

あまにもなさてたつねとりたらんもやかてそのおもひいて

うらめしきふしあらさんや

これもおなし女のことをいへりあるはあまになると又

尼になさてとり返してもみなよろしからぬ事は

おなし事也さるにより下の詞にとあらんおりもかゝ

らんきさみをも見すくしたらん中こそちきりふかく

あはれならめといへる也

045
(四五⑪)

われも人も心をかれしやは

とはさきのことくたとひ又あひそひてありともさやうならん

「一五オ

女はうしろめたくて心をかれぬことはあるましきの
心也これも伊勢物語に業平をすて、出し女の又いひ
かはしたりしかとうたかはしく覚えてなりひらの
わするらんと思こゝろのうたかひにとよみしやうの
たくひ也其心にも紫式部かきつらんと見えたり

046
(四五⑫)

又なの^めにうつろふ方あらん人をうら見てけしきはみそむ
かんはたをこかましかりなん心はうつろふ方ありとも見^そ。
めし心さしいとをしく思はゝさる方のよすかにおもひても
有ぬへきにさやうならんたちろきにたへぬへきわさ也

前の段はおとこの心さしあるを見しらすしてそむき
うらむる事をいへり是は又おとこあた人にてうつろはん
をおなしやうにうらみそむかはおとこはをこかましくおもふ
へしされはおとこの心はたのもしけなくとも見そめし
ちきりをちからなしと思ひて堪忍すへきの心也

047
(四六①)

すへてよろつの事なたらかにえんす^マへ事^マは見しれる

「一五ウ

さまにほのめかしうらむへからんふしをもにくからすかすめな
さはそれにつけてあはれもまさりぬへし

すへてといふはまへのあまたの事を以てかんようよかる
へきやうをかけるなり此段は紫のうへにあたれりさるに
より世にたくひなき人とはいへるなるへし

048
(四六③)

あまりむけに。ゆる^うへ見はなちたるも心やすくらうたきやう
なれとおのつからかるき方にそ覺侍かし

是又女の物えんしもせずおとこの心にまかせたらんは
た、おとこを思はぬにて侍るよしをかるき方にそ
覺え侍といへる也下の詞につなかぬ舟のうきたる
ためしとはふねは浪の千さとをもゆかんこそ本意なら
めともつなく事なければ舟のためあやうきにたとへ
いふなり

049
(四六⑥)

さしあたりてをかしともあはれとも心にいらん人のたのも
しけなきうたかひあらんこそ大事なるへけれ

「一六オ

これは頭中将こと葉也おほる月夜これにあたりま
ことにたのもしけなき所ありし人なり

050
(四六⑦)

我心あやまちなくて見すくさはさしなをしてもなとか
見さらんと覺えたれとそれさしもあらし

此心たとへはわかをかしと思ふ人もたらん人のうら
むへき事もなきをあやまちあるやうにうら見なしてそ
れをかことに他人にこゝろかはしなとすることあるをま
ことに大事なるへきと云也されはわかあやまちなくて
見すくさはたとひ一たんうら見ありともなとかおもひ
なをして見さらんのこゝろ也それさしもあらしとは
心不調にしてあたる女はさしもあらしと云也下
のことはにともかくもたかふへきふしあらんをのと
やかに見しのはんよります事あらしとの給ひて
わかいもうとの葵のうへをほめて覺すなるへし

051
(四六⑬)

よろつの事によそへおほせ木の道のたくみのよろつの物を

「一六ウ

心にまかせてつくりいたすもりんしのもてあそひもの、其
物とあともさたまらぬはそはつきされはみたるもけにかうも
しつへかりけりと時につけつゝさまをかへていまめかしきに
目うつりておかしきもあり

馬のかみか詞也女の色／＼のさまをいひてなをたとへを

もちて源氏の君にいひきかせたてまつる也木の道の

しわざの実ならぬ物をは宮つかへ人なとにたとへ

云なり

052
(四七②)

大事としてまことにうるはしき人のてうとのかさりと
するさたまれるやうなる物をなんなくし出る事まことの
上手はさまことに見えわかれ侍る

うるはしき人のてうとのかさりをは人の家あるしと

いはるへき女のかたにたとへ云也

053
(四七④)

又絵ところへ上手おほかれとすみかきにえらはれて

すみかきとはとりわき墨画は大事なれはいへる也

「一七オ

054 (四七⑨)

よのつねの山のたゝすまゐ水のなかれめにちかき人の家
ゐありさまけにと見えなつかしくやはらひたるかたなをしつ
かにかきませてすくよかならぬ山のけしき木ふかく世はなれて
たゝみなしけちかきまきのうちをはししらひをきて
なとをなん

まへにいへるゑのさまはその物ともなき女にたとへこれは
さるへき人の心をきてのあるへきやうをたとへ云也

055 (四七⑬)

手をかきたるにもふかきことはなくてこゝかしこのてんなかに
はしりかきそこはかとなくけしきはめるはうち見るにかとく
しくけしきたちたれと猶まことのすちをこまやかにかき
えたるはうはへのふてきえてみゆれといま一たひとりならへて
みれはなをしちになんよりけるはかなき事にかくこそ侍れ
まして人の心の時にあたりてけしきはめらん見るめの
なさけをはえたのむましく思給へて侍る

此三のたとへをいふ事馬頭源氏の君に世間の

「一七ウ

056 (四八⑧)

女のある様をとあるもありかゝるもありとかたりたてま
つれとまたとしわかうをはしませは直に其ことはりを
しらせ給はすやと思ひてたとへを引いていへるなり
これひとへに女のことをいふのみにあらず源氏の君
頭中将は世をまつりこち給ふへき君たちなれば女の
上にて世間の人のこゝろを、しへたてまつる物なり
文集大行路註に借夫婦以諷君臣不終也といへり

はやうまた下らうに侍りし時あはれと思ふ人侍りき

聞へさせつるやうにかたちなといとまほにも侍らさりしかは
わかき程のすき心には此人をとまりにもと思ひとゝめ侍らす
よるへとは思ひなからさうくしくてとかくまきれ侍りしを

これは馬頭むかしあひなれし女の心有様をいへる也

057 (四八⑭)

此女のあるやうもとより思ひいたらさりける事にもいかて此人
のためにはとなきてをいたしをくれたるすちの心をも猶
くちおしくは見えしとおもひはけみつゝ、

「一八オ

此人のためにとは馬頭か事也女の心に我おとこに

したかふさまを此人のためにはと心にいれおもひはけむ

心也この末のことはにうとき人に。^{みえは}おもてふせにやと

いふも他人にわかさまをみえは馬頭かおもてふせ

にやとかたちをもひきつくろひしとかたる也

058
(五〇①)

すこしをとなひんにそへて又ならふ人なくあるへきやうなと

をとなひんとは官位もあかり人くしくもならはい

よくあひおもふへきと女の心をとる儀也

059
(五〇③)

すこしうちわらひてよろつに見たてなく物けなき程を

見すくして人かすなる世もやと待かたはいとのとかにおもひ

なされて

是は女のいふ詞也見たてなく物けなきとは官位の

あさき事也官位はをそくともかならずのほるへ

ければその方をまつ事は心やましからすとなり

つらき心を忍ひてとは馬頭かあたなる心を見ん

「一八ウ

事は忍ひかたければたかひに別へききさみ也と
いひはなつ也

060
(五〇⑦)

はらた、しくなりてにくけなる事ともをいひはけまし

侍るに女もえおさめぬすちにてをよひひとつをひき

よせてくひて侍りしをおとろくしくかこちて

下のこと葉にあらは也

061
(五〇⑬)

てをおりてあひみしことをかそふれはこれひとつやは君かうきふし

えうらみしなといひ侍れは

うきふしを心ひとつにかそへつ、こや君かてをわかるへきおり

はらた、しくにくけなる事をいひはけましとは女に

あひて馬頭かいひける也女もおさめぬすちにてとは

のとけくなき心一すちにてといふ儀也さてたかひに

この哥をよみて立わかる、也されと馬頭か心に

まことにかはらんとはおもはぬ也

062
(五一③)

りんしの祭の調楽に夜ふけていみしうみそれふる

「一九オ

あゝ夜これかれまかりあかる、所にておもひめくらせは
せは猶家ちとおもはんかたはまたなかりけりうちわたりの
旅ねもすさましかるへくけしきはめるあたりはそ、ろ
さむくやと思ふ給へられしかはいか、おもへるとけしき
も見かてら雪をうちはらひつゝまかて、

臨時の祭は北まつりの事十一月中西也調楽は
午の日也ママ太内にてある事也うちわたりのたひ

ねとは内裏にたひねせん事也けしきはめる

あたりとは木枯の女のもとの事也そゝろさむきは

心につかす身の毛たつやうの事也いか、思へるとは

ゆひくひたりし女の心をゆかしく思ふゆへに彼家に

行けるなるへし

063
(五一⑧)

火ほのかにそむけて

女の家のださまなりおもしろかるへきさま也

064
(五一⑧)

なへたるきぬとものあつこえたるおほひなるこにうちかけて

あつこえたるは綿などの入たるにやそれをふせこの
大なるにかけたるへし

065
(五一⑩)

さうしみはなし

本人の事也馬頭かつま也

066
(五一⑫)

ひたやこもりに

なにゆへともなくこもる也哥などをもよみをかぬ

心なり此衣は馬頭かためにしをきけるなるへし

067
(五一④)

たつねまとはさんともかくれのひす

とは此女馬頭にふかくとをさかりてたつねまとはアせん

ともせぬ也

068
(五一④)

かゝやかしからず

とははちかゝやくなど云はたゝはつる事也ふかく

馬頭にはちすの心也

069
(五一⑦)

いたくつな引て見せしあひたにいたく思ひなきて
はかなくなり侍りしかはたはふれにくゝなむおほえ

侍りし

いたくつなひきてとは女は馬頭きたらはさこそとうち
なひきぬるをなを女をこらさんと思ひてわざとゆ
のけひきてよりつかぬ儀也たゝにはよらて春駒の
哥にてかける也たはふれにくゝとはありぬやと心み
かてらあひみねはたはふれにくゝの哥の心なり
あはんと。おもへとかく女の心をこらさんとし
たるはたはふれたる心也

070
(五二⑪)

たつた姫といはんもつきなからすたなはたの手にも
おとるましくその方もくしてうるさくなん侍りしとて
いとあはれと思ひいてたり

うせたりし女の物をよくそむる方の事を龍

田姫といひをりぬふ事をいはんとて七夕の手にも

おとるましくといへる也うるさくとはうるはしきといふ

心也真の字也此詞伊勢物語にあまた侍るへし

「二〇ウ

071
(五二⑫)

中将その七夕のたちぬふ方をのとめてなかり契にそあへまし
たちぬふかたは似すともなかりきりにあやからせたき
のよし也たちぬふわざはあへすそありけると云哥をとりて
いへるなり

072
(五二⑬)

そのたつた姫の錦には又しく物あらしはかなき花紅葉と云
も折節の色あひつきなくはかゝしからぬは露のはえなく消
ぬるわさなり

073
(五三②)

又しく物あらしとは馬頭か妻の物なとよく染させけるを
ほめたる儀也はかなき花紅葉といふもとは春の花秋の紅
葉は雨露のしわざにてあるうちにも花も色なくさき
もみちも色あひあしければ露のはえなきならひなるを
さやうにうつくしく染させけるはありかたき事にこそと頭中将
ひはんしてほめいへる也

さておなし比まかりかよひし所は人もたちまさり心はせゆへありと
見えぬへくうちよみはしりかきかいひくつまをとみなたとく

「二一オ

しからず見き、わたり侍りき見るめもことなく侍しかは

此さかな物をうちとけたる方にて時／＼かくろへ見侍し程はこ
よなく心とまり侍き

これは木からしの女也ゆひくひたりし女よりはおほくま
さりけめと心のきてのあた／＼しければかひなきとみゆ
是又人のこゝろのをしへにいへる也

074 (五三⑨)

神無月のころほひ月おもしろかりし夜うちよりまかて侍るに

あるうへ人きあひて此車にあひのり侍れは大納言の家にまかりとま
らんとするに

うへ人たれともなし木枯の女にかよへる人也大納言たれともなし

075 (五三⑫)

この女の家はたよきぬみちなりければあれたるくつれより池の水かけ
見えて月たにやとるすみかをすきんもさすかにて

木からしの女の家さま也

076 (五四①)

菊いとおもしろくうつろひわたりて風にきほへる紅葉のみたれ
なとあはれとけに見えたりふところなるふえとりいて、ふきならし

影もよしなとつ、しりうたふ

かけもよしは飛鳥井のうた也とりはすへしの心にて
うたへるにやつ、しりうたふ 嘸この字をつ、しりとよむ
といへり心は文章を口にてなす事とあり但こゝにて
いふつ、しりうたふは式の郢曲の様にはなくうちみたれ
うたふ心にや飛鳥井は二条万里少路にありと云々

077 (五四③)

よくなる和琴をしらへと、のへたりけるうるはしくかきあはせ
たりける程けしうはあらすかしりちのしらへは女のもの
やはらかにかきならして

律は秋をつかさとる女も秋をつかさとる也この比は神
な月なれば冬は又秋に属する物也

078 (五四⑦)

庭の紅葉こそふみわけたるあともなけれとねたます菊を
折て~~も~~のねも

ことのねもきくもえならぬやとなからつれなき人をひきやとめける
庭のもみちこそふみ分たる跡もなけれとねたますといふ

こと葉大かた心得かたきにや庭の紅葉のふみわけたるあと
あらんこそたれをかよはし給ひつらんとねたむ理も

侍るへきを跡もなきをねたむ心は此哥にてみえ侍り惣して

此女の所へ別にかよふ人ありと此うへ人きゝていへる儀

也心は琴のねも月もたくひなき御宿ながら御ために

つれなき人をはえやはひきとゝめ給へるかゝるおりふしも

われこそ庭の紅葉をもふみわけて見はやしたて

まつれといふ心なれはねたますの儀きこえ侍るにや

木からしにふきあはすめる笛のねをひきとゝむへきことのはそなき

まへの哥は別にかよふおとこを上人しりてつれなき

人をひきやとめけるとよめるを女はそのかよふ人の事をは

なにともしはてつれなき人と云を今のうへ人にしなして

よめる也此うへ人をひきとゝむへきことのはなしと琴を立

入ていへる也

079
(五四⑬)

にくゝなるをもしらて又さうのことをはんしきてうにしらへて

「二二ウ

いまめかしくかいひきたるつま音かとなきにはあらねとまはゆき
心ちなんし侍りし

にくゝなるとは此女うへ人になまめきかはすを馬頭聞

ておもへる事也この女は馬頭かつまなりしゆへ也はん

しきてうは冬の調子なれはおりにあへる儀也かとなきには

あらすとは一かとある儀也

080
(五五⑥)

御心のまゝにおらはおちぬへき萩の露ひろはゝきえなんとみゆ。ろ

玉さゝのうへのあられなどのえんにあへかなるすきくしさのみ

こそおかしくおほさるらめいまさりともしとせあまりか程に

おほししり侍なむ

萩の露玉さゝのあられに河海に引哥をかけり

さらにあたらさる事也たゝ心はうつくしくやうそう

よはくとするさまの人をそ御心にはおほしめさむの

儀也七とせあまりの程とは馬頭七年はかり源氏の君に

ましたてまつる儀にてわれらか年はかりにならせ

「二三オ

をはしまさはの心也又七といふは数おほき事にいへは
七とせ八とせもをはしまさはしろしめすへきの心也

081 (五五⑬)

中将はしれもの、物かたりをせんとて

しれ物とはつねにたかひたると云心にや

082 (五五⑬)

いと忍ひて見そめたりし人のさても見つへかりしけはひ
なりしかはたえくわすれぬ物におもひ給へしをさはかりに
成れはうちたのめるけしきみえき

さてもみつへかりしけはひなりしかはとはなにとなく

はしめてあへる人の心につくさま也なからふへき物とも

おもひたまへさりしとは行末とをくとまではおもはねと

なれゆくまゝにあはれと覚えてわすれぬ物にし

侍れは女もうちたのむけしきみえしなとかたりた

まへる也是より下の詞あらは也

083 (五六⑥)

おやもなく心ほそけにてさらは此人をこそはとことに
ふれておもへるさまもらうたけなりき

此女は夕かほの上なりおやとは三位中将なる人のよし
夕顔の巻にみゆさらはこの人をこそはおやなく

たよりなきまゝに頭中将をうちたのむよし也

084 (五六⑧)

このみたまふるわたりよりなさけなくうたてある事を
なんさるたよりありてかすめいはせたりける

見給るわたりとは頭中将北方右のおとゝの四君也

うたてある人にて夕かほのうへをおとしたる事也

さるに此夕顔の上は物おちをする人にてゆくゑなく成し

なり

085 (五六⑪)

おさなき物なとありしにおもひわつらひてなてしこの花をおりて
をこせたりしとてなみたくみたり

おさなきものとは玉かつら也

086 (五六⑫)

さてそのふみのことはととひ給へはいさやことなる事もなかりきや
山かつのかきほあるともおりくにあはれはかけよなてしこの露
さてその文のこと葉はと源氏の君のとひ給へる也文の

こと葉にてその人の程のしらるへければなにとなくとひ
給へる也いさやことなる事もなかりきやは頭中将の

こたへいへる詞也おもしろき心つかひ也さて哥の心は山かつ
のかきほあるともはあるゝとも也ひ下の心也わかあり
さまのはかなきやうの事也下句は玉かつらのことにかけて
あはれはかけよと中将をかこつ心也哥さまあはれる物にや

087
(五六⑭)

おもひいてしまゝにまかりたりしかはれるのうらもなき
物から物おもひかほにてあれたる家の露しけきをなかれて虫の
ねにきほへるけしきむかし物かたりめきて侍りし

れいのうらもなきとは夕顔の上のほんしやうのくせ也うらむ
へき事をもさそといはんはつかしき心にていひいてぬ儀也
さきましる花はいつれとわかねとも猶とこ夏にしく物そなき

さきましる花とは秋の庭のさま也しく物そなきとは
ほむる心なから床のえんにていへる也

088
(五七④)

やまとなてしこをはさしをきてまつちりをたになとおやの

心をとる

なてしこをはさしをきてとは玉かつらはわか御子なれば
さしをきていもとわかぬるの哥にて夕かほの君の心を
とる儀也夕かほの哥はわか身をはさしをきてなてしこの
露にあはれをかけよといへるをかやうにあひしらへる尤おもし
ろくや

うちはらふ袖も露けきとこ夏に嵐吹そふ秋は来にけり

是又女の哥也大かたの床も露けきに嵐ふきそふ
秋も来にけりといへるあはれふかし此嵐吹そふは頭中将
の北方の忍ひておとしいはせたりし事のはけし
さをことにてゝはいはすして嵐吹そふとおもひわひいへるさま
かなしくや

089
(五八⑨)

吉祥天女をおもひかけんとすればほうけつきくすしからん
こそ又わひしかりぬへけれとてみなわらひぬ

是は世中の女のいつれも心になふやうなければ吉祥天女

こそかきりなく侍らめとおもへは又仏法めきてくすみ
たる方なれはそれも心になふましきよしをいへる也

090
(五八¹³)

また文章の生に侍しときかしこき女のためしをなむ見給へし

是は藤式部か物かたり也これより下のことはあらは也

091
(五九⁵)

おやき、つけてさかつきもていて、わか二の道うたふをきけと
なんきこえこち侍りしかとおさくうちとけてもまからす

二道とは文集に富家女易嫁々早輕其夫貧家

難嫁々晩孝於姑此心は我女は貧家なれと御ため

にはせちに孝あらんと云儀也

092
(六〇¹)

をのこしもしさあなき物は侍る

をのこ程よきものは侍らすの心也

093
(六〇⁸)

月ころふひやうをもきにより

腹病などいふ事にや

094
(六〇⁸)

こくねつのさうやくをふくして

草葉はひるといふ物也夏の暑氣などに用る物にや

「二五ウ

さ、かにのふるまひしるき夕暮にひるますくせといふかあやなさ

心はこの香うせんととき立より給へといへるをとかめて

くへきよひともまたすして此香うせて後といへるは

もしあらぬかこつけにやと云也

あふ事の夜をしへたてぬ中ならはひるまもなにかまはゆからまし

心あらはなり

095
(六二⁵)

五月のせちにいそきまいるあしたになにのあやめもおもひしつめ

られぬにえならぬねを引かけて九日のえんにまつかたき

詩の心をおもひめくらしいとまなきおりにきくの露をかこち

よせなとやうのつきなきいとなみにあはせ

五月節には天皇あやめのかつらをかけ武徳殿に行幸

あり内弁外弁節会のことし宮内省献菖蒲内侍

女藏人統命縷を群臣に給ふ三献おはりて六府騎

射の事ありなにのあやめもおもひわかれぬにとはかゝるおり

ふし大やけ事のこゝろおもひしつめぬ儀也えならぬ

「二六オ

ねをひきかけとはえんならぬねと云心也五日にはえんなる

事なれとかゝるいそかはしきおりにはえんならぬ心なるへし

九日のえんにまつかたき詩の心をおもひめくらすとは重

陽宴には天皇南殿に出御ありて内弁外弁等

あり文人博士等をめして題をたてまつらしめて

おのゝ韻の字をさくりにて詩を作て講する事あり

如此のおりふしに菊の露などをかけて人に哥よみかくる事也

096
(六二⑧)

さならでもをつからけに後におもへはおかしくもあはれにもあるへき事の

哥なとよみかけなとする事は後のあはれにもなること

なるをおりふしのつきなき時よみかくるかあしきと云也

みなこれおとこ女のをしへにいへる也

097
(六二⑩)

よろつの事になとかはさてもと覚ゆるおりから時ゝおもひ

わかぬはかりの心にてはよしはみなさけたゝさらんなむめやすかるへき

まへはすさましく似あはぬおりなとをきらひいへりこゝは又

一切その。かのおりひとへに心もなくおもひわかぬいやしき

「二六ウ

心はかりにてはなとかはあらんよしはみなさけたゝん事か

めやすかるへきといへる也これ又人のをしへなるへし

098
(六三②)

からうしてけふは日のけしきもなをれり

これは雨夜之物かたりの翌日也从らうしてとは長

雨のはるゝに俗にやうゝして晴たるなといふ同事也

099
(六三⑫)

こよひは中神内よりはふたかりて侍りけりときこゆ

左のおとゝの御所の事也二条院もおなしすちにてと

いへる大内よりはたつみの方に此御所ありけるか花

鳥に二条院をは二条東洞院たるへきよし見えたり

なか神は天一神をいふといへり

100
(六五②)

あるしもさかなもとむとこよろきのいそきありく

風俗の玉たれの哥にあるしもさかなもとめにこゆる

きのいそにわかめかりあけなとありこれは中川のやと

の事もあるしは紀伊守也

101
(六五⑫)

おほす事のみ心にかゝり給へればままつむねつふれてかやうの

「二七オ

つゐてにも人のいひもらずさむをき、つけたらん時と覚え給ふ

おなしやとにて源氏の君のたちき、し給ふ時わか

御うへをいふを聞給ふ時の事もおほす事とは藤つほの宮に

〔ママ〕
蜜通の事也

102
(六五⑭)

式部卿の宮の姫君にあさかほたてまつり給ひし哥などをす

こしほうゆかめてかたる

式部卿宮は源氏の君の御伯父なり姫君は槿の斎院

の事也ほうゆかめては方曲也すくにもかたらぬ也

103
(六六④)

戸はり帳もいかにそはさる方の心なくてはめさましきあるし

ならんとのたまへはなによけんともえうけ給らすとかしこまりてさ

ふらふ

これは我家と云さいはらの哥にわか家は戸はり帳^をも

かけたるを大君きませむこにせんそのみさかなになによけん

あはひさたうかなと、いふことは也いま源氏の君のの給ふ

こゝろはこよひたれにても御そひふしにまいらせよと云

「二七ウ

心にて大君きませむこにせんといふ哥のはしを

の給へる也紀伊守かなによけんともえうけたまはら

すといふはさるへき女なとあるへきとも覚えぬの心也

104
(六六⑧)

けはひあてはかにて十二三はかりなるもありいつれかいつれ

なととひ給ふに是は故右衛門督のすゑの子にていとかな

しくし侍りけるをおさなき程におくれ侍てあねなる人のよす

かにかくて侍る也

十二三はかりなるといふ事はうつせみのおと、小君也

父は中納言にて右衛門督かけたる人也

105
(六六⑫)

此あね君やまうとの後のおやさなむと申

このあね君とはこ君かあねといふ儀也まうと、はしやう

くわんしての給へる事也後の親は継母也

106
(六八⑥)

中将の君はいづくにそ

つかはれ人の名也空蟬かたつねていふことは也

107
(六八⑬)

中将めしつればなん人しれぬおもひのしるしある心ちしてとの給ふを

「二八オ

源氏の君のたちき、給へはうつせみか中将はいづくにそと
女房をよふをき、給ひてわか御身の官中将にてをはし
ませはわれをよひつるやうにとりなしてのたまへる也

108
(七〇⑤)

かやうなるきは、きはとこそ侍るなれとて

心はぬしある物にはかゝるたはふれせぬならひのよしを
申也源氏の君き、給ひてそのことはりをもしらぬよし
におほめき給ふ也

109
(七一⑧)

いとかうかりなるうきねの程をおもひ侍るにたくひなく
おもひまとはるゝ也

かりなるうきねの程とはうつせみは公卿の子にて伊与
の介かめとなる事ははかなきちきりなれはそれを
かくうきねとは心のうちにおもふ也ねはぬる心也

110
(七二③)

鳥もしはくなけは心あはた、しくて

つれなきをうら見もはてぬしのゝめにとりあへぬまておとろかすらん
とりあへぬまては鳥をそへていへる也つれなきをうらみも

「二八ウ

はてぬとはこよひのちきりを実なきよしに中将に
きかせむとてかくよめる也うつせみの返しとり
かさねても鳥をよそへたり

111
(七二⑩)

ひきたてゝわかれ給ふ程心ほそくへたつる関のつらくもある
関のとみえたり

あふ坂の名をはたのみてこしかともへたつる関のつらくもある
かな実なきよしかこつけによくかなへる引哥也

112
(七二⑭)

月はあり明にて光おさまる物から影さやかにみえてなかゝ
おかしきあけほのなり

月の光おさまるとはやうく明かたちかうなれは月の光
のほのかに成行となを影さやかに見えたるおりふし
なるへし中くおかしきとは夜半の月なとより影

うすき暁月のおもしろき心也源氏の君のたちわかれ
給ふおりふし也此下の詞へかけてよく心をつけて見侍へき物也

113
(七五⑦)

あこはしらしなその伊よのおきなよりはさきに見し人そざれと

「二九オ

たのもしけなくひほそしとてふつ、かなるうしろみ
まうけて。あなつり給ふなめり

あことは我子といふ心也小君をかく源氏の君のの給へる
也伊よのおきなよりさきに見し人そとは空蟬伊与介
か妻にならぬさきにわかあひ給ひし人そとさもなき事
を小君にのたまふなりくひほそしとはひわつなる
事也ふつ、かとは下すしくふとりなとしたるさま也
われをはひはつに物けなしとてふつ、かなるうしろ
見の伊よの介になれてわれをあなつりぬると小君に
かなしくおもはせんとての給へるなるへし

宗祇奥書

(※三〇丁オは墨付き無し)

本文
文明十七のとしふ月のはしめつかた児女子の
ために註し侍りさためてひか事おほくはへ
らんかし

宗祇

